

文部科学省委託事業
令和元年度 教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業
実施テーマ6. 民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上

主題「NPOとの連携に基づくファシリテーション力育成を目指した
教員養成・研修プログラム開発」

報 告 書

令和2年3月

国立大学法人 岡山大学

《目 次》

I. はじめに	1
II. 事業目的と期待される成果	4
III. 調査研究の内容と方法	8
IV. 教員の資質・能力としてのファシリテーション力の必要性和意義に関する事例調査	11
V. ファシリテーション力育成を目標とする教員養成カリキュラムの開発・実施・効果の検証	25
VI. NPO等におけるインターンシップの企画・実施・効果の検証	57
VII. 現職教員と大学生・大学院生が交流するイベントの企画・実施・効果の検証	64
VIII. 大学の教員や現職教員を対象とする研修会の企画・実施・効果の検証	73
IX. まとめと今後の課題	83

1. はじめに

本事業は、学校と連携した活動に取り組むNPOと連携しファシリテーションスキルを効果的に習得させる教員養成プログラムを開発し、その効果を検証するものである。ファシリテーション能力の育成は、話し合いを中心とするアクティブ・ラーニングを効果的に進めるために必要な資質である。本事業ではファシリテーターとして学校を支援しているNPOと連携し、教員の養成・研修プログラムを開発し深い学びを実現できる教員の育成を目指す。

今回のような事業が本学において可能であるのは、岡山大学がこれまで岡山県内の各方面の教育機関と強い結びつきを作り、連携を充実させてきたからである。まずはこの点について述べておきたい。平成23年に教育学部、大学院教育学研究科、教師教育開発センター、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会は、包括協定を締結した。この包括協定の内容は、教員養成に関すること、教員研修に関すること、学校教育上の諸課題に関すること、教育研究の協力に関すること等である。本申請に関する連携内容は、これらすべてであり、年間3~4回開催する連携協力会議において検討する。その他の市・村教育委員会は、インターンシップ実施校を管轄する教育委員会であり、岡山県教育委員会との包括的な協定により、個々の教育委員会と協定は結んでいないものの、実務的なことにおいて、連携を行なっている。県内の小中学校との連携については、これまでも実習やインターンシップに関連する協議会・反省会を実施してきており、学校教育現場の求める教師像や教員養成段階にある学生が身に付けておくべき力についての検討を継続して行ってきた。本事業の推進にあたっては、これまでの岡山県や岡山県内各市の教育委員会と連携事業を行ってきた経験の蓄積が大いに役立ったということは言うまでもない。また、本学が各教育委員会と連携して行ってきた各種の研修等から得た知見に基づいて本事業は企画された。

平成28年に岡山大学と(独)教職員支援機構は連携協力協定を締結し、さらに、平成29年には西日本では初の大学拠点となる「教職員支援機構岡山大学センター」を開設し中国地方を中心とした教員の養成・採用・研修に関わる諸機関のネットワークの中核的役割を担うようになった。本申請に関する連携内容は、連携協力協定に基づく教員の養成に関わる事項全般であり、プログラムの開発にあたっては、同機構との連携の経験が大いに役立っていることは言うまでもない。

また、岡山大学教育学部は、過去にも「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に応募し、採択され、成果をあげてきた。

平成29年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業については、テーマ5の新たな教育課題の必修化のための研究事業と、テーマ6の教職課程における質保証・向上に係る取組の調査研究事業に採択された。テーマ5に関しては、「学生の学びを深める長期学校インターンシップのあり方に関する調査研究-学生、学校、教育委員会の

Win-Win-Win の関係構築のための連携-」というテーマのもと調査・研究を行った。本事業では、大学が教員養成カリキュラムに位置付ける「長期学校インターンシップ」において学生の実践的指導力の基礎の育成を図ると同時に、学校が抱える教育課題を解決するために、大学、教育委員会、学校の三者が連携し、それぞれの課題を明確にした上で実施方法、支援体制を構築しようとした。効果的な長期学校インターンシップを取り入れたカリキュラムと、その運用方法を提案することができた。

また、テーマ6に関しては、「教科内容構成学に基づく教員養成カリキュラム構築を促進する環境整備のための調査研究—『教科教育と教科内容の架橋』を実現する連携構築を目指して—」というテーマで、事業を遂行した。本事業では、岡山大学大学院教育学研究科がこれまで取り組んできた教科内容構成学構築の実績に基づいて、教員養成カリキュラムの効果的な運用を促進したり抑制したりする要因を明らかにし、教員養成改革のためにはどのような環境整備を行うべきかについて、ハード、ソフトの両面から提案するための調査・研究を行った。事業の成果としては、教科内容構成学について本学の研究集録に特集号を組み学術論文として成果をまとめるとともに、教員養成カリキュラムの見直しを図ったうえで、その成果に基づいてシンポジウムやワークショップを開催した。両事業ともに、報告書をまとめるとともに、文部科学省内で行われたフォーラムにおいてポスター発表を行った。

平成30年度の「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」については、テーマ3の研修の単位化・専修免許状取得プログラムの開発において採択され事業に取り組んだ。テーマは、「現職教員に対する研修講座・公開セミナー等の修了により教職大学院において単位を授与する制度の導入・プログラム開発」である。本事業を通して、教職大学院においてラーニングポイント制度を本格的に導入し、より多くの現職教員が教職大学院で研鑽を積む機会を得ることができるようになる道を拓いた。また、平成30年度には、独立行政法人教職員支援機構の「教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業」にも採択され、「校内OJTチームを核とした若手・中堅教員授業力向上研修プログラム（授業力パワーアップセミナー）の研究開発」というテーマで、岡山県教育委員会と連携をして事業を行った。これは、岡山県教育委員会が推進する「校内チーム制」を実質的に稼働させ、若手・中堅教員の授業力向上に大学教員が組織的・継続的に参画・支援することを特徴とするものであった。このプログラムでは教科教育並びに教科内容学を担当する大学教員が講師として参画し、効果的な研修を行った。本事業は、岡山大学と岡山県教育委員会の連携の成果であり、教員の養成と研修の連続性を図るうえで大いに成果をあげた。

岡山大学大学院教育学研究科は、以上のように、ここ数年に限っても各種調査研究に継続的に取り組んできており、成果をあげてきている。このような経験の蓄積が、本事業推進の強力な裏付けとなっている。

さらに、岡山大学教育学部においては、大学全体で推進している地域社会と連携した実践型教育の一環として、地域で活躍するNPO等と連携した授業を実践してきた。なかでも「NPO法人だっぴ」とは、キャリア教育の推進を通じて連携し、昨年度は、

岡山県教育委員会と連携し、県内の高等学校において、現職教員と教員を目指す学生がともに学ぶ研修プログラムを実施した。「NPO法人岡山市子どもセンター」とは、学部及び大学院の授業の実施を通じて連携し、学校外での子供の自然体験教室等の活動に学生が参画し、教員としての実践的な能力の育成を目指してきた。この二つ以外にも岡山県内はもちろん、県外のNPO法人と連携しながら、プログラムの共同開発、インターンシップの実施を本事業の中で行った。

Ⅱ. 事業目的と期待される成果

1. 課題認識

平成 27 年 12 月の中央教育審議会答申において、各教科の指導に関する専門的知識の習得はもちろんのこと、「教科等を越えたカリキュラム・マネジメントのために必要な力、アクティブ・ラーニングの視点から学習・指導方法を改善していくために必要な力」など、教員には「学びの専門家」としての側面が必要であることが明らかになった。そして、そのためには、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力が必要とされ、教員が多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担することも求められるようになった。教育現場では、教科指導に関しては、これまでの長い研究・研修の蓄積があり、そのための資質向上も図られているが、カリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニングへの対応に関しては、教育現場の多忙化もあり、そのような力の育成が十分に進まないという状況が見られる。しかしながら、コンテンツベースからコンピテンシーベースへと転換が図られた新しい学習指導要領では、教科を越えた学力の育成がこれまで以上に求められるようになり、総合的な学習（探究）の時間の充実が求められている。教えることの専門家ではなく、子供達の主体的な学習を支援する「学びの専門家」としての教員の育成、教科の学習と教科外の学習を連動させカリキュラム・マネジメントができる教員の育成は、我が国の学校教育の改善にとって焦眉の急であると言える。

このような中で、子供達の学びは急速に多様化し、学校の外でも様々な機関が子供たちの学習支援に大きな役割を果たしている。その中でも、特に NPO 法人の活躍は目覚ましく、企業等の研修で培ったノウハウを学校教育の改善に活かし、学校と連携しながら地域社会に貢献している団体も多く見られる。このような団体では、従来の知識伝達に重点をおいた教授法ではなく、話し合い等を多く取り入れたアクティブ・ラーニングを主とした教育プログラムを開発し実践している。これらの団体と連携しながら教育改善に努めている学校も見られものの、そのような事例は限られている。NPO が持っているノウハウや教育資源を学校教育が活かしていないのが現状である。岡山大学教育学部では、このような課題意識を従前から抱いており、岡山大学全体で推進している実践型教育の一環として、教員養成プログラムの中に社会連携型の授業を取り入れてきた。本事業は、そのような取り組みをより体系的・計画的なものとし、効果を検証したうえで、全国に向けてその成果を発信していこうとするものである。

2. 事業目的

本調査研究の目的は、岡山大学教育学部がこれまで取り組んできた社会連携に基づ

く実践型教育の成果を活かしつつ、NPOと連携した教員の養成・研修プログラムを開発・実践し、その効果を検証していこうとするものである。その目的は、具体的には次の三点である。

- (1) 教員の資質としてのファシリテーション力の必要性とその育成原理を明らかにすること**
- (2) 教員の養成・研修においてファシリテーション力を効果的に育成するための教育プログラムの構成原理を解明すること**
- (3) NPOと大学や教育現場をつなぐ有効な手立てを明らかにすること**

「主体的・対話的で深い学び」すなわちアクティブ・ラーニングを効果的に展開するためには、従来の知識伝達モデルに代わる教員像が必要であるが、その回答の一つが、参加型の学習においてこの成長を支援するファシリテーターである。ファシリテーションの能力と教員としての資質の共通項を明らかにしたうえで、それを育成するための原理を解明することが(1)の目的である。そして、(2)は、教員の養成・研修のプログラムに、ファシリテーション能力の育成を効果的に組み込む方法を解明することである。このようなプログラムは、大学や学校単独で実施できるものではなく、NPOとの連携が不可欠であるが、そのような団体のスタッフとの役割分担のあり方の解明も本事業の目的の一つである。(3)は、上記のような目的を達成するうえで、NPOと大学や教育現場が連携するための具体的な方法を解明することである。外部機関との連携が強く求められているものの、NPOはそれぞれ個別の活動目的を持っており、それらは必ずしも公的な研究機関である大学や公教育を担う学校の目指すものと一致しない。そのようなギャップがNPOと大学や学校が連携するうえでの障害になりがちである。そのような目的や価値観の相違をいかに乗り越えていくべきか、その具体的な方法を本事業では解明していきたい。以上のような三点を主要な目的として、NPOと連携して地域の教育改善を推進し得る教員を育てる方法を明らかにしていきたい。

3. 期待される成果

調査研究期間内には、これまでの本学の取り組みを体系化させるだけでなく、他の地域においても応用可能な成果を発信できるように下記の5点を成果目標として設定した。

- (1) NPOと連携をし、ファシリテーション力育成を目指した教員養成のための授業科目を開発・実践するとともに、評価のための指標と方法を提案する。**
- (2) 教員を目指す学生がNPO等で実践的に学ぶインターンシップのプログラムを開**

発し実践する。

- (3) NPOと教育委員会との連携に基づいて、ファシリテーション力育成を目指した教員研修プログラムを開発し、大学生や教職大学院生も参加する研修会を行いその効果を検証する。
- (4) 教員を目指す意欲を高めるため、現職教員と大学生や教職大学院生が語り合うキャリア教育のプログラムをNPOとともに開発・実践しその効果を検証する。
- (5) 大学の教員養成プログラムの改善や現職教員の指導力向上を目指して、NPOのスタッフによる大学教員や現職教員を対象とする研修会を開催する。

(1)～(3)については、プログラムを実施するだけではなく、他の地域や大学においても応用可能なプログラムの構成原理や指導方法を提案するとともに、授業や研修の参加者の評価データを分析してその効果を明らかにしていきたい。(1)は、教員養成カリキュラムの中でも実践可能な授業科目を、NPOと連携をしたうえで開発し、ファシリテーション力育成を教員養成の中に明確に位置付けるということである。(2)は、授業に加えて、実際の教育現場においてある程度の期間、継続的にNPOの活動に関わることを通して実践的な力を身に付けさせることを目指している。(3)は、現職教員の力量形成のためのファシリテーション能力育成のための研修プログラムを開発し、その場に大学生や院生も参加して、養成と研修の一体化をファシリテーション能力育成の中で実現しようとするものである。

さらに、(4)については、このようなキャリア教育を通して教員を目指す大学生や教職大学院生の意識がどのように変容するか、また、彼らとの交流から現職教育がどのような影響を受けるかということを一明らかにし、スキルアップだけではなく、教職を目指す意識向上のためのプログラムの効果や必要性を解明していく。(5)は、ファシリテーション力について、教員養成を行う側の教員や、それを活用して実際に教育現場で子供を指導する教員の理解を深めるための研修である。このような研修を通して、教師文化の根底に流れる知識伝達モデルからの脱却を目指し、教員養成カリキュラムや学校教育の改善につなげていきたい。

本事業においては、上記のような成果目標の達成度を測定するために、以下のような指標を設定する予定であった。

- ア) ファシリテーション力育成を目指した授業の効果については、それを履修した学生の満足度や達成感に加えて、面接やインタビューを通して、ファシリテーションに対する理解の深まりやその活用に向けての意欲が高まっているかどうかを確認する。
- イ) インターンシップについては、参加した学生の活動前後の変化をアンケートやインタビューによって確認し、教員としての資質の高まりを実感できるかということとともに、実際にワークショップ等に参加してもらい、成果を活かすことができるかどうかを観察によって確かめる。

- ウ) 現職教員や大学教員を対象とする研修会については、アンケート調査によって満足度を確認するとともに、ファシリテーションに対する理解の深まりや教員の資質として位置付けられているかどうかを質問紙調査等によって測定する。
- エ) キャリア教育に関わるイベントの成果については、既にNPOが行っている事前事後調査のノウハウを活用して、その効果を検証する。

当初の予定では、以上のような方法によって成果を実証的に確認していきたいと構想していた。

Ⅲ. 調査研究の内容と方法

1. 調査研究の内容と方法

本事業は、具体的には下記のような内容・取組方法を通じて遂行しようとした。

(1) 教員の資質・能力としてのファシリテーション力の必要性和意義に関する事例調査

(2) ファシリテーション力育成を目標とする教員養成カリキュラムの開発・実施・効果の検証

(3) NPO等におけるインターンシップの企画・実施・効果の検証

(4) 現職教員と大学生・教職大学院生が交流するイベントの企画・実施・効果の検証

(5) 大学の教員や現職教員を対象とする研修会の企画・実施・効果の検証

(1)については、岡山、そして全国各地で学校と連携しながら活躍しているNPOを訪問し、その活動に同行しその様子を観察したうえで、スタッフや連携している学校の教員へのインタビュー調査を行うなどして、教員の資質・能力としてのファシリテーション力の内容と、その意義を解明していく。

(2)については、ファシリテーション力を育成するための授業科目を、教員養成カリキュラムの教養科目、専門共通科目、専門選択科目それぞれにおいて開発し、それらを体系的に配置したカリキュラムを構想するとともに、授業を実践しその効果を検証していく。

(3)については、インターンシップ受け入れ可能なNPOを見い出し、1週間から1カ月程度その団体に学生又は教職大学院生を派遣し、団体の活動に従事しながらファシリテーション力を身に付けさせるとともに、NPOと学校の連携のあり方について学ばせる。終了後には体験等についてレポートを作成させるとともに、その体験を他の学生や院生と共有するために、報告会を行い、これからの教員としての資質・能力や学校と学校外の機関との連携について考えを深めさせる。

(4)については、NPOが行っているキャリア教育を学内で行い、現職教員と大学生や教職大学院生が交流する場を設けるとともに、そのイベントを通じた彼らの変容をアンケート調査やインタビュー調査によって明らかにする。また、同様のキャリア教育を附属中学校の生徒対象に行い、中学生と教員を目指す学生が交流するイベントも実施し、身に付けたファシリテーション力を大学生が中学生を対象に発揮する場として位置付けることも考えている。

(5)については、既に各地で講演活動を行うなどの実績をもつNPOのスタッフを招き、大学の教員や現職教員を対象とする研修会を実施し、ファシリテーション力の教員の資質・能力としての位置づけ等について理解を深めさせたい。

以上のような具体的な取組を通じて、アクティブ・ラーニングを効果的に展開し、形式主義・活動主義的な学習に陥らない、質を伴った学習者主体の授業を展開できる教員の育成を図りたい。

2. 事業スケジュール（当初の予定）

月	事業内容
2019年	
4月	○事業実施担当者を中心に調査研究の概要を検討しスケジュールを組む。
5月	○これまで連携をしてきた岡山県内の各NPOと本事業の実施について打ち合わせを行い、調査・研究事業の趣旨について共通理解を図るとともに、スケジュールについて確認する。 ○学校と連携しながら活動を展開しているNPOと交渉を行い、本事業への協力を依頼するとともに具体的な調査・研究内容について共通理解を図る。
6月	○ファシリテーション力育成を目指した教員養成カリキュラムの開発に着手し、具体的な授業科目を設定し、内容及び実施時期や方法を確定する。 ○事例調査・研究の対象となるNPOを選定し、調査計画を立案する。
7月	○ファシリテーション力育成を目指した授業科目を実施する。 ○学校と連携しながら活動しているNPOを訪問し、調査を行う。 ○現職教員と学生・教職大学院生が交流するイベントを企画する。
8月	○NPOへの訪問調査を実施する。 ○NPOでのインターンシップの企画を検討し、夏休み期間を活用して実施する。
9月	○NPOの講師を招き、ファシリテーション力育成を目指した現職教員研修を実施する。 ○NPOでのインターンシップを実施する。
10月	○前半に実施したファシリテーション力育成のための授業科目の効果について検討を行い、年度後半に向けた改善を行う。 ○インターンシップ参加の学生・大学院生に対する事後指導を行うとともに、その効果を検証する。
11月	○ファシリテーション力育成のための授業科目を実施し、その効果を検証する。 ○NPOのスタッフを講師として、ファシリテーション力育成を目指した大学教員を対象とする研修を実施する。 ○インターンシップ参加学生・院生の報告会を実施し、インターンシップの成果の共有を図るとともに、その効果を検証する。
12月	○NPOと連携したキャリア教育を附属中学校にて実施し、その効果を検証す

<p>2020年</p> <p>1月</p> <p>2月</p> <p>3月</p>	<p>る。</p> <p>○NPOと連携し、キャリア教育の一環として学生・教職大学院生と現職教員が交流するイベントを開催し、その効果を検証する。</p> <p>○7月から順次実施しているNPOの訪問調査の成果を取りまとめて、収集したデータを分析・検討する。</p> <p>○教員養成カリキュラムの開発・実施、インターンシップの企画・実施、NPOの調査研究、キャリア教育プログラムの企画・実施、ファシリテーション力育成のための研修会の企画・実施という5つの取組内容について、その成果の取りまとめを行う。</p> <p>○本事業の報告会を兼ねたシンポジウムを企画し、学生や大学院生を含む大学関係者だけではなく、岡山県内の学校教育関係者、事業において連携したNPOのスタッフ、教育行政関係者等を招いて実施する。</p> <p>○本事業の報告書を作成し、成果を全国の教員養成大学や教育委員会等に公開する。</p> <p>○本事業のホームページを設置し、成果を公開する。</p> <p>○次年度以降の事業の継続の仕方について検討する。</p>
--	--

IV. 教員の資質・能力としてのファシリテーション力の必要性和意義に関する事例調査

1. NPO法人の訪問調査

(1) 「認定NPO法人カタリバ」の訪問調査

- ① 日時 2019年5月24日～25日
- ② 場所 三日市ラボ（島根県雲南市木次町29）
- ③ 内容

岡山大学大学院教育学研究科・桑原敏典が、雲南市で「雲南市高校魅力化プロジェクト」に取り組むNPO法人カタリバを訪問し、同団体の取り組みの概要について聞き取り調査を行った。また、雲南市教育委員会も訪問し、NPO法人カタリバとの連携の仕方とその成果について聞き取り調査を行った。

「雲南市高校魅力化プロジェクト」とは、下記のような目的のもとに実施されている事業である。

「日本の25年先の高齢化社会を迎えていると言われている課題先進地域、島根県雲南市。子ども・若者・大人のチャレンジが連鎖する、持続可能な課題“解決”先進地を本気で目指すこのまちだからこそできる、オリジナルで質の高い教育と課題解決型人材の育成を実現したい。課題先進地から、教育の未来の当たり前をつかっていきたい。そんなコンセプトで、市内2つの高校の魅力化に取り組む高校支援コーディネーターチームを配置しています。行政と連携した仕組みや制度づくり、また学校と協働し魅力的な教育現場づくりを推進する存在として、高校のカリキュラム設計やプロジェクト型学習の授業開発と実施に取り組んでいます。」

（NPO法人カタリバのホームページから引用。2020年3月14日閲覧。
https://www.katariba.or.jp/activity/project/unnan_school/）

このような目的のもとで、NPO法人カタリバは、二つの高校（島根県立三刀屋高等学校、島根県立大東高等学校）の探究型学習プログラムの開発・実践に取り組んでいる。

調査においては、同団体のスタッフや雲南市教育委員会の担当者から活動の具体的内容や成果、連携に至った経緯等について詳しい情報を聞き取った。

(2) 「NPO法人みらいず works」の訪問調査

① 日時 2019年9月10日～11日

② 場所 NPO法人みらいず works（新潟県新潟市西区坂井砂山2-18-2）
新潟県生涯学習推進センター（新潟県新潟市中央区女池南3丁目1-2）

③ 内容

岡山大学大学院教育学研究科・桑原敏典が、新潟県を中心に学校のキャリア教育や探究学習の企画・運営を支援しているNPO法人みらいず works を訪問し、同団体の代表理事・小見まいこ氏の協力を得て聞き取り調査を行った。

小見氏は、同団体のホームページにおいて、団体設立への思いを下記のように語っている。

私は新潟市の郊外の地域で生まれ、毎日近所の空き地や公園で、幼なじみたちと遊びまわって育ちました。

母が留守のときは近所のお宅でおやつや夕飯を食べさせてもらったり、毎日何気ない挨拶を交わす日々。

八百屋さん、なんでも屋さん、クリーニング屋さん…働く大人の姿も身近に感じながら、地域のおばさん、おじさん、おばあちゃんたちの自然であたたかな見守りの中、成長してきました。

10数年たった私は大学で社会教育を専攻し、まちづくりの世界に飛び込みました。「こんな面白い生き方をしている大人がたくさんいるんだ」と世界が広がる出会いをたくさんいただき、自分の価値観や大切にしたいことが次第に明確になっていきました。

同時に、まちや人を通して、地域の抱える様々な課題と出会っていきました。とくに子どもたちを取り巻く環境に問題意識をもち、今の子どもたちに失われつつある、あたたかな眼差しを向ける地域や社会を再生していくことが、地域で育てられた自分の恩返しであり、使命ではないかと思うようになりました。

そんなとき、一緒に育ってきた幼なじみたちが「生きていても楽しくない」と胸の内を明かしてくれました。

年間3万人が自殺をし、70万人の引きこもりがいる、3人に2人の高校生が将来のことを考えると不安になるという情報だけでは得られない、身近でリアルな現実を突きつけられた想いでした。

自分のできることを、やりたいことを、求められていることはなんだろうか。

もがきながら探し、向き合う日々が続きました。

そんな中、少しずつですが、自分のビジョン、役割が見えてきました。

今を生きる子どもや若者たちが、自分を認め、自分の力で前に進んで行くための、

力になりたい。

一人でも多くの子どもたちが生きていてよかった、生きるって面白いと感じられる社会をつくりたい。

そんなとき「キャリア教育は日本を救う」というメッセージに出会いました。

子どもたちが自分と向き合い、多様な生き方と出会う中で、自分のみらいをつくっていく「キャリア教育」。

その場づくり、教材づくり、しくみづくりを通して、子どもたちの生きる意欲や力が引き出されていければ、一人ひとりが自分らしく、主体的に生きる社会が実現できるのではないか。

一人でも多くの子どもたちに、その機会をつくり、一步を踏み出すきっかけをつくってあげたいと思っています。

この度設立するにあたって、中学時代の恩師が言っていたある言葉を思い出しました。

「冒険者であれ」という言葉です。

もっと自分らしく、人生を冒険するように、生きる喜びを感じながら歩む一人であるために、子どもたちに、「こんな生き方もできるんだ」「なんかわくわくしてきたぞ」と勇気や希望を与えられる一人であるために、まずは自分から動き出すことにしよう。

「みらいず works」の活動は始まったばかりです。

一人ひとりの想いをつなぎ、感謝しながら、子どもと大人の明るいみらいづくりに関わっていきたいと思います。

(NPO法人みらいず works ホームページより引用。2020年3月14日閲覧。
<https://miraisworks.com/message/>)

聞き取り調査では、みらいず works のこれまでの取り組みの内容や現在の活動状況だけではなく、設立までの経過やその思いについて小見氏の率直な考えを伺うことができた。また、本事業の一環であるインターンシップの実施方法について打合せを行った。

(3) 「NPO法人岡山市子どもセンター」の訪問調査

① 日時 2019年12月4日

② 場所 岡山市子どもセンター（岡山県岡山市北区久米348 旧白石幼稚園内）

③ 内容

岡山大学大学院教育学研究科・桑原敏典が、NPO法人岡山市子どもセンターを訪問し、同団体の今年度の活動や本事業における連携内容、今後の事業展開について

て聞き取り調査・意見交換を行った。対応していただいた同団体のメンバーは以下の通り。

- ・代表理事・美咲美佐子氏
- ・副代表理事・道仙八代己氏
- ・理事・久保田将裕氏

NPO法人岡山市子どもセンターは、子どもたちの社会参画の機会を拡げ、子どもたちがのびやかで、豊かな「子ども時代」を過ごすことができることを目指して様々な活動に取り組んでいる。その活動は、舞台芸術鑑賞、プレーパークでの遊び支援、キッズフェスティバルの開催、夏休みフリー塾など多岐にわたっている。同団体のホームページには、下記のような、団体の目的が記されている。

【わたしたちが目指すもの】

感動する体験の中で、豊かな自然の中で、おとなに愛される中で、
失敗を重ねそこから立ち直っていく中で、
子どもは、心豊かに育っていきます。

子どもには、「豊かな子ども時代」を過ごす権利があります。
ひとりひとりの個性が輝き、夢や希望が語れる社会。
そんな社会の実現を、子どもたちと目指しています。

(NPO法人岡山市子どもセンターのホームページより引用。2020年3月14日閲覧。<http://www.kodomo-npo.jp/>)

聞き取り調査及び意見交換においては、同団体の活動に関わることが学生にとってどのような意味を持つか、彼らがそこから何を学ぶことができるか、教員を目指す学生にとって同団体のような学校外の組織における活動経験がどのように役立つかといったことについて議論を深めることができた。

(4) 清水市における「みらいず works」によるファシリテーション授業の調査

①日時 2019年11月14日(木)

②場所 静岡県静岡市立清水第六中学校(静岡県静岡市清水区天王西10-40)

③内容

岡山大学教育学部4年生藤澤里奈が、静岡市立清水第六中学校において「みらいず works」が実施したファシリテーション授業を調査した。授業では、話し合いを楽しく、面白くするための考え方やスキルについて、中学生が実際に話し合いを行いながら学んでいった。

(5) 雲南市における高校魅力化プロジェクトの調査

①日時 2020年2月6－7日

②場所 島根県立大東高等学校（島根県雲南市大東町大東637）

③内容

岡山大学大学院教育学研究科1年生の金縄あかりと林田圭が、島根県立大東高等学校において、NPO法人カタリバが実施した探究活動を調査した。総合的な学習の時間を活用した探究活動のプログラムについて資料を収集した。

2. NPO法人スタッフ等へのインタビュー調査

(1) ファシリテーション能力の育成に関するインタビュー調査

（以下の内容は、岡山大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース社会科専修 02428106 藤澤里奈が2020年1月に提出した岡山大学教育学部令和元年度卒業論文『教師に求められるファシリテーション能力に関する研究—インタビュー調査に基づいて—』に基づく）

①調査目的

本研究は、教師の資質・能力としてファシリテーション能力が必要である意義、教師に求められるファシリテーション能力とはどのようなものかについて明らかにする。

②調査対象

調査対象は、学校や地域と連携しながら教育に関わる教育関係者5名であり、以下のような形で教育に関わっている。

	どのような形で教育に関わっているか
A 氏	〇県教育委員会で高等学校魅力化推進担当。教育関係 NPO 法人理事。
B 氏	環境教育系一般社団法人勤務。教育関係 NPO 法人代表。
C 氏	教育関係 NPO 法人代表。
D 氏	教育関係 NPO 法人勤務。
E 氏	教育関係 NPO 法人勤務。

③調査方法

半構造化インタビューによる聞き取り調査を行った。そのインタビューデータを分析することで、教師の資質・能力としてファシリテーション能力が必要な意義、教師に求められるのはファシリテーション能力とはどのようなものかについて明らかにする。

④調査実施日

インタビュー調査は、一人 30 分～40 分程度で、以下の 5 日間の日程で行った。

	インタビュー実施日
A 氏	2019/10/31
B 氏	2019/11/08
C 氏	2019/11/11
D 氏	2019/11/12
E 氏	2019/11/13

⑤結果と考察

今回の調査では、インタビュー調査参加者が、教育に対してどのような思いをもって関わっているのか、それを踏まえて教師に求められる資質・能力は何か、教師にはどのようなファシリテーション能力が必要であるか、そして、それらがあることによってどのようなことを期待できるのかについて中心に語っていただいた。そのうえで、以下の二点を中心に結果を考察していく。

①教師にはどのようなファシリテーション能力が必要か。

②教師がファシリテーション能力をもつことで、どのようなことが期待できるか。

①教師にはどのようなファシリテーション能力が必要か。

教師がファシリテーションにおいて必要な能力は、次の 2 点である。

㊦「場の空気を読みながら、その場の状況に応じて必要な手立てができる力」

㊧「その場にいる人を受け止め、共に場を作ろうとする力」

まず、㊦「場の空気を読みながら、その場の状況に応じて必要な手立てができる力」というのは、ファシリテーターとして必要なスキルの部分である。目的を設定し、その場の目的が達成できるように、準備してきた手立てを行う。しかし、A氏の「計画、計画通りにいくじゃなくて、計画通りにやってるんだけど、計画をアレンジしていけるとか」の発言のように、場づくり（ここでは授業）において必ずしも計画通りにはいかないことがある。だからこそ、その場その場の状況に応じて必要な手立てをしていくことが必要である。そのために、場を作るときに設定した目的を意識しつつ、B氏の発言にある、その場のメンバーでしか作れない現場の「空気感、温度感。」を汲み取りながら、その場に何が必要かを考え、手立てをすることができる力が必要である。

次に、㊧「その場にいる人を受け止め、共に場を作ろうとする力」について。ファシリテーターがいて、ファシリテーションを取り入れて、場づくりを行おうとしても、ファシリテーターの一人の力だけで場を作ることはできない。E氏の「他者と共につくるってことをどんな場面でも諦めないというか、常にその可能性も模索し続けるというか、姿勢ってファシリテーションには一番大事やなって。」の発言にあるように、「共に場をつくる」という認識は、ファシリテーターにとっても一参加者にとっても、すなわち、その場に参加する全員にとって必要なマインドである。だから、ファシリテーターには、共に場を作るということを諦めないという姿勢はもちろんのこと、参加者もそのような姿勢で場に参加することができるように、「安心・安全な空間」をつくろうというマインドが合わせて必要である。安心・安全な空間として、D氏の「ちょっといい言葉が見あたらないのだけど、誰もが発言しても、否定はされないような空間づくり。」という発言のように、「否定しない」すなわちE氏の「ひとりひとりの存在を受け止めている。」といった「受け止める力」こそ必要であると言える。

A氏の「(ファシリテーターのスキルにあたる部分を述べた後に) やっぱり、安心というか」といった発言や、D氏が教師の資質・能力としても、ファシリテーターに求められる能力としても、「受け止める」ことが大切であると述べているところ、E氏の「ひとりひとりの存在を受け止めている。存在を言葉とかだけじゃなくって、この人の生きているってことがね、話さなくてもいいから、私はたぶん、ファシリテーションだけじゃなくって、生きていく中でそうゆうことをしたって思ってた。」の発言のように、ファシリテーションにおいてマインドの部分はあくまでも大前提の上で、ファシリテーターとしてのスキルが必要であることが表れている。

㊨教師がファシリテーション能力をもつことで、どのようなことが期待できるかについて。子どもの「学び」に影響を及ぼすだけではなく、教師も子どもと共に学び合う関係ができ、子どもが社会をつくる仲間として成長していくことが期待できる。

B氏が、「一緒にやればいいのに、同じように子どもたちは教えられる側で、先生は教える側で、じゃなくって子どもたちも一緒に社会をつくる側で、子どもたちのレベルには応じるかもしれない、考えるけど。子どもたちは自分たちで考えられる場所、ための時間だったりとか、機会だったり先生がちゃんと用意するってというのが面白いんじゃないかなって思うよ。」と述べている。さらに、D氏は「一人一人が発言をして、それが1つの価値として認められて、その組織自体が回っていくっていう構造自体が、すごく魅力を感じる、社会をみんなで作っていくことなのかなと思ってるので、それができるようになるためには、どうしたらいいんだろう、学校教育などのそういう経験が大事なんだろう」と述べているように、学校教育段階から、大人であるか子どもであるかを問わず、社会に参加して社会をつくることのできるような機会を設けていくべきだと考えが表れている。

「子どもが社会をつくる仲間として成長していくことが期待できる」ようになるには、ファシリテーションがもたらす効果が合わさってもたらすのではないか。ファシリテーションを取り入れることの効果の一つとして「子どもの自発性を育むことができる」ようになることが挙げられる。A氏が「自分の考えに基づいて、行動できるってというのが大切で、だからやっぱり自分の考えとか、自分の中にあるものが何なのかっていうのを気づかせる」必要だと述べている。また、それらができない場合はファシリテーションを取り入れて行われる必要があると述べている。つまり、ファシリテーションによって、子どもの考えなどを引き出される経験を経ることで、自分の意見をもとに行動できるという段階に近づけることができ、少しずつ「自発性」を育むことができる。

ファシリテーションを取り入れることの効果のもう一つとして、「対話ができる」ようになることが挙げられる。B氏の「その面でいうと、子どもたちが変わると思うな。学校の授業の中で、教室の中で、子どもたち同士がちゃんと対話をして、ちゃんと話ができたとしたら、」という発言のように、ファシリテーションを取り入れて対話ができるようになると、他の面においても子どもたちの姿の変化に期待できるということが表れている。

以上の「子どもの自発性を育むことができる」「対話ができる」ようになることで、教師も子どもと共に学び合う関係をつくることのできるのではないかと推測される。共に学び合う関係ができれば、B氏が話していた「子どもたちも社会をつくる側」すなわち大人も子どもも社会をつくるということを目指せるのではないだろうか。共に社会をつくるなかで、話し合ったり、考えたりが繰り返されることによって、最終的に、E氏の話していた「共に生きる喜び」が生まれてくるのではないだろうか。

ファシリテーションによって、子どもたちの自発性を育んだり、対話を促すことができる。それは、「主体的で対話的で深い学び」のための一つの方法であり、教師にファシリテーション能力が求められる意義であると言える。さらに、子ど

もたちの「学び」にとっただけではなく、子どもたちに「共に生きる喜び」をもたらせられるという点についても、教師にファシリテーション能力が求められる意義であると言える。

先行研究では、教師の教科観・授業観の形成に関する研究がなされているが、ファシリテーション能力に関しては語られてこなかった。しかし、本研究では、インタビュー調査において、教科観・授業観の中に、ファシリテーションを位置付けて語られているところがあった。今回のインタビュー調査参加者は、学校や地域と連携しながら教育に関わっている方々であり、ファシリテーションの必要性というものが、学校や地域と連携しながら教育をする上で、必要だと感じたのではないかと推測される。教師にファシリテーション能力が求められる意義を明らかにしていく中で、教師が、学校が、地域と連携していく必要性も浮かびあがった。そうすると、これからの教師には、教師に求められる資質・能力として地域と連携していく力も必要であり、教員養成過程において、学校以外の教育団体・機関など地域と連携していくためのプログラム開発が必要であると言えるのではないだろうか。

(2) NPOの役割や意義に関するインタビュー調査

(以下の内容は、岡山大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース社会科専修 02428137 横田佳奈が2020年1月に提出した岡山大学教育学部令和元年度卒業論文『地域社会における子どもの成長に関する支援—岡山市内のNPOの活動を事例として—』に基づく)

①調査目的

本研究は、NPOの役割や意義について、特に教育的観点から明らかにするために、当事者たちの意識や意図を明らかにしようとしたものである。

②調査対象

NPO法人岡山市子どもセンターのスタッフ3名

③調査方法

下記の日々にインタビューをそれぞれの活動場所で行った。

2019/12/5 (プレーパーク)

2020/1/14 (岡山市子どもセンター事務所)

④結果と考察

インタビュー調査により、プレーパークでのやりがいや目的、目指す子ども像や地域像を中で、地域で子どもの成長を支援する人の教育観が明らかになった。

それは、「子どもが自分らしく生活していけるような自己肯定感を育み、自己決定をしていけるようになることが大切である」というものである。近年、価値観の多様化に伴い、教育の多様性も求められている。そのような社会の中で、団体スタッフが子どもたち一人一人の個性を受け入れるという立場に立ち、活動を継続していくことは、教育の多様化に対応しているとも言える。スタッフが子どもの成長に関して共通の信念をもっているからこそ、活動の継続や広がりにつながっていると考えられる。

プレーパークは、乳幼児から地域のお年寄りまで様々な世代が交流する場となっていた。以下の観点から、それぞれの世代にとっての意義を整理していく。

①子どもにとって

子どもにとって、プレーパークは遊びを通して、様々な体験ができ、成長につながる場である。プレーパークは一般的な公園では禁止されているような、火を使うことや木に登ることができるため、子どもは家や学校ではできないような幅広い体験ができ、失敗や成功をしながら様々なことを学んでいく。また、異年齢の友達や大人など、新しい人間関係を築くことができる。プレーリーダーや大人が見守ってくれているため、大きな事故や犯罪に巻き込まれるリスクも低く、安心して遊べる場である。プレーパークは遊ぶだけではなく、ただ自分の時間をのんびりと使うこともできるため、困難を抱えたときのシェルターとしての役割もある。

②保護者にとって

若いお母さんたちにとって、プレーパークは情報共有の場となっている。子育てに悩みが付きものであるため、同年代の母親同士で話す機会や、作業を一緒にする機会は必要である。また、プレーパークには常にプレーリーダーや地域の大人がいるため、子どもたちは親以外の大人と遊ぶことができる。「一緒に遊んでくれる人がいるっていうのは、とても楽です」という母親の言葉もあったが、プレーパークは、保護者にとっても息のつける場所となっている。家にこもって一人で子育てをすると息も詰まる思いだが、子どもと一緒に遊びに出られる場所があるというのは助かるという。

③地域の人、ボランティアにとって

プレーパークは、地域の人やボランティアの協力で成り立っている。ボランティアは子育てを終えた世代や、お年寄り、高校生や大学生等、年代は様々である。ボランティアは子どもと関わる楽しさや、子どもを見守る大切さを学び、イベントの企画、運営に携わることによって自己肯定感を育むことができる。

つまり、多様な人が集まるプレーパークは、子どもや地域の大人の居場所となっている。地域に様々な世代が交流する場所があるということは、学校のみならず、地域で子どもを育てていくということにつながると考えられる。

本研究の実態調査では、学校とプレーパークとが直接連携している場面は見られなかった。しかし、土曜日や日曜日には現職教員がボランティアとして手伝い

に來たり、学校に行きづらい子どもが平日の昼間に遊びに來たりと、少なからず学校教育との関わりがあると感じた。また、教員が地域の子育て支援の場を知っていることによって、学校外の子どもの居場所を紹介することができたり、子どもとの多様な関わり方の視点を持つことができたりすると考えられる。学校とNPO法人が連携していくことも必要であるが、まずは教員である個人が、地域の教育と関わろうとすることで、学校教育と地域での教育のつながりが広がっていくだろう。

(3) 企業と学校教育の関連に関するインタビュー調査

(以下の内容は、岡山大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース社会科専修 02428130 村上貴史が2020年1月に提出した岡山大学教育学部令和元年度卒業論文『開かれた教育課程における学校と企業の連携の在り方について—連携におけるメリットと壁に着目して—』に基づく)

①調査目的

本研究は、企業と学校の連携に基づく教育活動展開のねらいや方法について、双方の当事者へのインタビューから明らかにしようとするものである。

②調査対象

「水島臨海鉄道沿線ガイドブック作成プロジェクト」において学校との連携を行った、倉敷商工会議所青年部の1名、水島臨海鉄道の社員1名、萩原工業株式会社の社員1名、倉敷芸術科学大学の教授1名、倉敷中央高等学校の教師1名の計5名である。

③調査時期

2019年11月から12月

④調査内容

質問内容としては、大きく分けて「水島臨海鉄道沿線ガイドブック作成プロジェクト」に関する内容と連携に対する考えに関する内容の二つである。具体的な質問としては、①プロジェクトになぜ参加しようと思ったのか、②プロジェクトに参加してよかったことは何か、③学校と連携してよかったことは何か、④学校との連携において苦労したことや困難に感じたことは何か、⑤継続的な連携はあったか、⑥学校との連携において壁と感ずることは何か、⑦学校との連携において大切であると考えられることは何か、が挙げられる。

⑤結果と考察

水島臨海鉄道沿線ガイドブック作成プロジェクト」において学校と企業の連携を行った倉敷商工会議所青年部のA氏、水島臨海鉄道のH氏S氏、萩原工業株式会社のY氏、倉敷芸術科学大学のK教授、倉敷中央高校のM教師にインタビューを行い、その分析をした結果、いくつかの共通した意識を持っていることが分かった。

今回のプロジェクトに直接関係する部分としては、大きく分けて二つの共通点が挙げられる。

一点目は、今回のプロジェクトの成功要因としてプロジェクトの目的・内容のよさを挙げていることである。「水島という地域の活性化のため、学生などの若者が中心となって、水島臨海鉄道沿線ガイドブックを作る」という目的・内容が非常に共感できるものであるとともに、協力したいと思えるものであったため、連携の輪が広がり、プロジェクトの成功につながったと考えていた。

二点目は、今回のプロジェクトが連携のひとつのきっかけとなったということを実感していることである。プロジェクト以前から関係を持っていた機関はあるものの、多くの学校や企業は今回のプロジェクトにおいて初めて連携を結んだ。ほぼゼロベースから始まり、最初は少数の機関で始まったプロジェクトではあったが、結果としては非常に多くの学校や企業との連携がなされた。インタビューの結果から、ゼロから関係を作ることは難しいものの、一度関係ができると連携のハードルが下がり、その後も次々と連携が広がり、継続していくと考えていることが分かった。

次に、今回のプロジェクトでの経験を含めたこれまでの連携の実践から、学校と企業の連携に対して持っていた共通の意識についてである。

一つは学校と企業の連携において考えられる壁として、資金面の問題、時間的な問題、人員の問題の大きく分けて3つを挙げていることである。資金面に関してはどこからプロジェクトにおいて必要な資金を生み出すかということが大きな問題として挙がっていた。プロジェクトの大小によってかかる金額は異なるものの、必ず資金は必要となる。しかし、利潤を追求することが使命である企業にとって、社会貢献に近い形での連携に対して資金を運用することは難しく、また公的な機関である学校が多額の資金を調達することも困難であると考えており、資金の問題に対してどのように対処するのかについては苦労した経験からも課題として挙がっていた。時間的な問題としては、スケジュールの調整や管理などが難しいと感じていた。大きなプロジェクトとなるとそれだけ連携機関も増え、考慮しなければいけないことも多くなるため、それらを全て踏まえたうえでの時間の調整や管理となると負担の大きいものとなる。また、人員の問題にも関わってくるのだが、プロジェクトの活動時間などをどのように確保するのが難しいと感じていた。企業としては、連携を担当するための社員は当然おらず、社員それぞれに本来の業務があるため、連携に対して仕事として時間を使うことは難しいという状況がある。一方で学校としても教員の多忙化が叫ばれている今、連携活動

に時間を使うことは難しいと感じている。時間の制約というものを連携の壁として考えていた。そして、人員の問題についてであるが、企業としては先ほど述べた通り、連携を担当する社員はいないため、連携に対して人員を割くということは困難となることから、ボランティアのような形で労働時間外に連携活動に取り組むなどが必要となってくる。また、学校や大学としても連携が授業として位置づいていない場合、ボランティアのような形で人を集めなければならない。プロジェクトに参加するメンバーをどのように確保するかに困難を感じていた。

インタビューの結果から学校と企業が連携してプロジェクトを行う際に重要と考えられるポイントについてもいくつかの共通点があった。

一点目は、プロジェクトの目的・内容を学校と企業の両者の共通した意識に沿ったものにするということである。今回のプロジェクトが成功した要因としてもこの目的・内容がよいものであったことを挙げている。学校と企業では業種が異なり、もともと共通点が少ない。そのような二つの機関が連携して一つのプロジェクトを行う際に、学校と企業が共通して持っている課題意識や目的意識は何かを踏まえ、それに沿った目的・内容にする必要であると考えていることが分かった。そして、その学校と企業を結ぶ共通したものとして地域が挙げられていた。学校も企業も少なからず地域との関係を持っており、地域に関わる目的・内容であるプロジェクトについては当事者意識を持って、さらにはそのプロジェクトにメリットを見いだして関わることができるのではないかと今回のプロジェクトでの経験からも感じていた。

二点目は、プロジェクトの旗振り役、全体のまとめ役を担うキーパーソンの存在である。プロジェクトが大きいものであればあるほど連携機関も増えていき、各機関がそれぞれでやり取りを行うことは困難となる。そこで、プロジェクトをスムーズに進めるうえでキーパーソンとなる人物が必要となるのである。今回のプロジェクトでは倉敷商工会議所青年部のA氏と倉敷芸術科学大学のK教授がキーパーソンにあたる。この2名はインタビューの結果から、プロジェクトを立ち上げただけでなく、プロジェクトの必要に応じた連携機関の拡大や全体のスケジュール調整、資金の調達などプロジェクトを進めるうえでとても重要な役割を担っていたことが分かった。

三点目は、大学や商工会議所といった機関が間に入り、学校と企業の連携をつなぐということである。二点目の中で、プロジェクトのキーパーソンが倉敷商工会議所青年部のA氏と倉敷芸術科学大学のK教授であったことから、大学や商工会議所の存在というものが今回のプロジェクトにおいて欠かせないものであったことが分かる。学校や企業は連携において考えられる壁として挙げた通り、時間的な制約がかなりあり、一対一での連携というものは負担が大きい。そこで、大学や商工会議所といった機関が間に入り、全体の調整といったことをするのが理想の形であると考えていることが分かった。大学は中学校や高校に比べ連携を

授業の中に取り入れやすい環境であり、地域の多くの機関と関係を持っている。商工会議所についても連携を結んでいる機関が多いことに加え、企業に比べ連携に対して人員を割くことができる環境がある。よって連携において大学や商工会議所といった機関が重要となると考えていた。

四点目は、関係が続く場の存在である。以上の三点についてクリアしたとしても、インタビューの結果から、やはりゼロから連携を結んでプロジェクトを行うということは負担が大きく、大変であると感じていることが分かった。そして、そのような経験から今ある経験を大切にすることが重要であると考えていることも分かった。飲み会など気軽に声をかけあえる場があれば、連携というものがスムーズに進んでいく。今ある関係をもとに連携を結び、プロジェクトを進め、必要に応じて新たな連携先を増やすというのが負担の少ない方法であると考えていた

V. ファシリテーション力育成を目標とする教員養成カリキュラムの開発・実施・効果の検証

1. 開発のねらい

近年の教育職員免許法の改正を受けて、教員養成を行っている大学においてはカリキュラムの見直しが一斉に行われた。中でも、教職課程コアカリキュラムの整備は、これまで、個々の担当教員の裁量にある程度ゆだねられていた免許取得に必要な科目の内容について、何を目指して、どのような内容を教授し、どのような力を身に付けさせるかを公式に示すことにより、我が国の教員養成の方針それ自体も明確にすることになった。そのこと自体は大いに評価されるべきであるが、改正された教員免許法にしても、提示された教職課程コアカリキュラムにしても、実践を重視し、大学だけではなく教育現場における実践的な学びに取り組み、学術の成果を教育現場に活かすことができるようにするという姿勢は基本的に維持されている。数十年前の知識伝達型の教授法が一般的であった時代であれば、このような方針も十分に説得力があるのだが、アクティブ・ラーニングの導入が進み、コンピテンシーベースのカリキュラムが実践されるようになってきた今、AI（人工知能）の技術の発達により、学習が時間や場所を選ばず個別に行うことができるようになり始めている今、そのような教員養成の方針で十分と言えるのだろうか。数十年先を見通した、もっと大胆な教員養成の改革が必要ではなからうか。以上のような問題意識から、今回の事業の中で取り組んだ教員養成カリキュラムの改革においては、以下の二つの方針を特に重視した。

- ア) 学術の成果としての知識や技能の伝達という目的ではなく、子ども自らが学習の過程を通して新しい価値を創造し知識や技能を構築していくことを目指し、学びをコーディネートできる教師の養成
- イ) 何を教えるかではなく、何をできるようにするかということをベースに学びを構成するため、学校の中ではなく学校外の社会の状況やそこからの要請をふまえて教育目標を設定できる教師の養成

以上の二つの方針の下で、このような観点から学校の学びを改善したり、学校外で子どもの学びを構成しようとしているNPO法人の協力を得て、教員養成カリキュラムの検討を行った。そのうえで、教員養成カリキュラムの中でも実践可能な授業科目を、NPOと連携をしたうえで開発し、ファシリテーション力育成を教員養成の中に明確に位置付けていった。

2. 開発プログラムの構成

岡山大学教育学部の現在の教員養成カリキュラムは、実践的指導力の育成をねらいとして、教育実習・体験的授業科目を軸（コア）にしたものとなっている。この、岡山大学版「教員養成コア・カリキュラム」は、今回の文部科学省による教員養成コアカリキュラムの提示に先駆けて示されていたものである。岡山大学教育学部では、今日の教員に求められる力量を学習指導力、生徒指導力、コーディネート力、マネジメント力の4つとし、それらを体系的に養成するカリキュラムを構築した。本学のホームページでは、それら4つの力量とカリキュラムについて以下のように説明している（以下、岡山大学教育学部のホームページより引用。2020年3月15日閲覧。

<https://edu.okayama-u.ac.jp/faculty/curriculum/>)

教育学部では、実践的指導力を身につけた教員を養成するために、教育実習・体験的授業科目を軸（コア）にした「教員養成コア・カリキュラム」を開発しました。

教員養成コア・カリキュラムにおいては、今日教員に求められる力量を、下記の4つの力に分類して、「教育実践力」として設定しています。

学習指導力（子どもの学習を指導する力量）

生徒指導力（子どもの生活を指導する力量）

コーディネート力（家庭・地域・同僚・諸専門家と協働する力量）

マネジメント力（教師として必要なマネジメントの力量）

以上の4つの力の育成を大学での授業と学校教育現場での実践との有機的連関のもとに展開するために、カリキュラムの中核に1年次から4年次にわたる教育現場での体験・実習活動を位置づけ、それらによって学校教育現場の求める実践的指導力を備えた教員を養成することを目指しています。

また、学校現場や他の機関（博物館、福祉施設等）との連携による教育実践力の育成を意図した「フィールドチャレンジ」を設定し、具体的なプログラムの企画・立案から実施、評価までを体験できる科目や学校での長期にわたる実践的経験を積む「教職実践インターンシップ」も導入しています。

以上のような特徴を持つ教員養成コア・カリキュラムにより、1. 学習指導力、2. 生徒指導力、3. コーディネート力、4. マネジメント力という4つの教育実践力をバランスよく身に付けた、反省的で創造的な教員を岡山大学教育学部のめざす教師像として、教員養成を行なっています。

さらに、岡山大学教育学部においては、現在、大学の4年間を5つの時期に分けて、それぞれの時期のねらいを意識しながら学生が履修できるように、各コース・課程の履修モデルを作成している。下記の表1が、それぞれの時期と、そのねらいや内容である。「教職への意欲向上期」、「教育実践理解期」、「基礎的教育実践力養成期」、

「発展的教育実践力養成期」、「採用前研修期」という5つの段階を経て、4つの力をバランスよく身に付けた教員を養成しようとしているのである。

表1 各期のねらいと内容

期	学年	ねらい	内容
教職への意欲向上期	1年前期	1年生を教育実践の世界に誘い、教職に対する夢と希望をさらにふくらませる。	・教育と教育実践，教育の制度と社会に関する入門的な授業科目 ・子ども・教育実践にふれる観察学習。
教育実践理解期	1年後期 —2年前期	教育実践の諸構成要素および実践の事実に関する理解をふくらませ，教育実践観を拡張する。	・学習と学習指導，子どもの発達，生徒指導，各教科の内容と指導法など，教育実践を理解するための多様な授業科目。座学中心の時期。
基礎的教育実践力養成期	2年後期 —3年前期	教育実践に必要な実践的指導力を身につけ，多様な教育実践を経験する中でそれを高める。	・学習指導，生徒指導に関する実践的指導力を養成する発展的な授業科目 ・各教科の内容と指導法に関する科目 ・3年次後期の主免教育実習の事前指導 ・総合演習。
発展的教育実践力養成期	3年後期 —4年前期	教育実践をめぐる新しい課題について理解するとともに，いつでもどこでも発揮できる真の教育実践力を身につける。	・新しい教育実践課題を理解し探求する授業科目（教科の指導法開発） ・主免教育実習と応用的な教育実習 ・プロジェクト科目
採用前研修期	4年後期	教育実践を研究する力量および即戦力としての実践的指導力を高める。	・学校教員インターンシップ ・卒業研究

この表に基づいて、構想したモデルカリキュラムの一例を次ページに図1として示しておく。これも、本学のホームページにて公開されている。なお、このモデルは、免許法改正後のカリキュラムに適応したもので、令和元年度に入学した学生から利用できるものである。

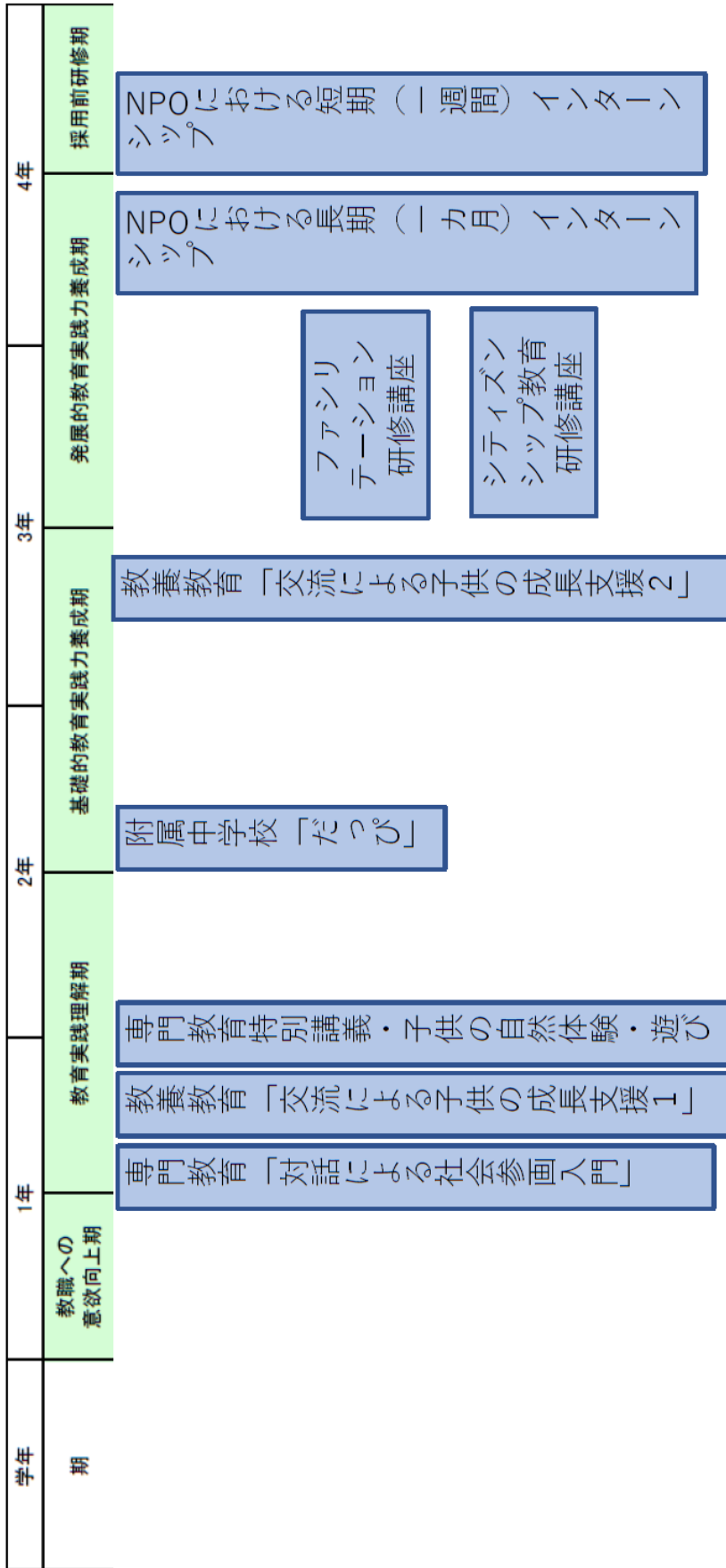
このモデルをふまえながら、ファシリテーション力育成を目標とする教員養成のための授業科目等を体系的に配置して作成したカリキュラムが、その次のページの図2である。本事業の一環として専門教育や教養教育にNPOと連携して実施するファシリテーション力育成のための授業科目をいくつか設定するとともに、授業外の体験的活動や講座、インターンシップを体系的に配置して、4年間でファシリテーション力を核とするこれからの辞退に求められる教員としての新たな力量を形成できるようなカリキュラムになっている。

図1 岡山大学版教員養成コア・カリキュラムの履修モデル（小学校コース）

		1年		2年		3年		4年		
学期		1・2	3・4	1・2	3・4	1・2	3・4	1・2	3・4	
期	教職への 意欲向上期	教育実践理解期								
	教育の制度と社会	基礎的教育実践力養成期								
	教職論	発展的教育実践力養成期								
コーディネータ 力	【教育社会学・教育法制論・ 生涯学習社会学・教育経営学】									
マネジメント 力	【学校教育の経営と実践】 【学校組織のマネジメント】									
実践的 指導力	附属学校外	フィールド・チャレンジ(学校支援ボランティア等体験的授業科目)								
	附属学校	教育実習 I (観察・参加実習)								
学習指導 力	各教科の指導法(授業研究)									
	各教科の内容研究									
	カリキュラム論									
授業科目	教育の方法と技術									
	【現代教育方法学・学習意欲向上 の原理と方法・教育評価測定】									
	外国語活動の指導法									
生徒指導 力	【教育哲学・日本教育史・西洋教育史】									
	児童心理学									
	生徒指導論 I 特別活動論									
道徳教育論										
発達障害教育概論										
注: 【 】は選択必修科目										
【情報メディアの 授業活用】										
教職実践演習 卒業研究										
教職実践インターンシップ										
採用前研修期										

文部科学省「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」テーマ6 民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上
 岡山大学教育学部主題「NPOとの連携に基づくファシリテーション力育成を目指す教員養成・研修プログラム開発」

図2 ファシリテーション力育成を目標とする教員養成カリキュラム案



3. 各授業科目の開発・実施・検証

(1) 教養教育におけるファシリテーション力育成を目指した授業科目：「交流による子どもの成長支援Ⅰ・Ⅱ」

この授業は、NPO法人だっぴと連携し、同団体が企画している中学生だっぴというイベントに参加することを含め、子どもと主体的に関わることを主な内容とする授業科目である。授業の概要は次ページの通りである。ⅠとⅡは連続する授業というわけではないが、Ⅰを履修し、子どもと関わる体験をした学生が、より主体的・積極的に関わっていくことを求めているのがⅡである。

ア) 概要

この授業は、「NPO 法人だっぴ」との連携に基づいて実施するものです。NPO 法人「だっぴ」は、大人と若者がつながり地域の未来をつくることを目指して活動しています。本授業は、「だっぴ」が取り組まれている活動のうち、中学生が大人と語り合い多様な生き方や働き方に出会って自分たちの将来について考える「中学生だっぴ」への参加を主な内容としています。中学生の精神的な成長を支援する活動に関わることを通して、今の子どもたちが何を考え、どのような不安を抱えているかを知るとともに、彼らの成長を手助けするために大人に何ができるかについて考えを深めることを目指しています。授業の実施時期は、団体がイベントを開催する時期に合わせて設定されますので、授業実施時間が時間割通りにはならないことをあらかじめ了解したうえで受講してください。

イ) 到達目標

この授業を受けることで、履修した学生が次のことができるようになることを目指します。

1. 中学生の成長を大人として見守り、支援することに対する意欲や態度を育成する。
2. 交流を通して子どもの成長を支援するためのスキルを理解したうえで身に付ける。
3. 交流を通して子どもの成長を支援することの喜びを実感し、やりがいを感じる。

ウ) 履修年度・学期

1 年生、4 学期

エ) 履修者・

学部 1 年生を中心に 6 名

オ) シラバス

授業科目	交流による子どもの成長支援 I
担当教員 (所属)	桑原 敏典 (02:教育学部)
学期	2019年度 Q:4学期
曜日・時限	月曜7, 月曜8
単位数	1
教室	一般教育棟 B 2 3 教室
ナンバリングコード	LCGZ0LAFZ1001N
印刷用ページ	https://gs.okayama-u.ac.jp/campusweb/campussquare.do?_flowId=SYW4101101-flow&nendo=2019&shozoku=91&jikanwari=2034&sylocale=ja_JP
科目区分	2019年度入学者: 教養教育科目/実践知・感性 (実践知) 2018年度入学者: 教養教育科目/実践知・感性 (実践知) 2017年度入学者: 教養教育科目/実践知・感性 (実践知) 2018年度以前入学者は, 講義番号が異なる場合がありますので, 以下のHPをご確認ください。 (http://www.okayama-u.ac.jp/tp/student/timetableindex.html)
対象学生	2019年度入学者: 全 2018年度入学者: 全 2017年度入学者: 全 2018年度以前入学者は, 講義番号が異なる場合がありますので, 以下のHPをご確認ください。 (http://www.okayama-u.ac.jp/tp/student/timetableindex.html)
必修・選択の別	必修
他学部学生の履修の可否	対象学生の項目を参照
連絡先	kuwabara@okayama-u.ac.jp
オフィスアワー	火曜5・6限
学部・研究科独自の項目	関連しない
使用言語	日本語
授業の概要	この授業は、「NPO法人だっぴ」との連携に基づいて実施するものです。NPO法人「だっぴ」は、大人と若者がつながり地域の未来をつくることを目指して活動しています。本授業は、「だっぴ」が取り組まれている活動のうち、中学生が大人と語り合い多様な生き方や働き方に出会って自分たちの将来について考える「中学生だっぴ」への参加を主な内容としています。中学生の精神的な成長を支援する活動に関わることを通して、今の子どもたちが何を考え、どのような不安を抱えているかを知るとともに、彼らの成長を手助けするために大人に何ができるかについて考えを深めることを目指しています。授業の実施時期は、団体がイベントを開催する時期に合わせて設定されますので、授業実施時間が時間割通りにはならないことをあらかじめ了解したうえで受講してください。
学習目的	この授業は、子どもの成長に関わろうとする意欲や態度、そのために必要なスキルを身に付けてもらうことを目指します。
到達目標	この授業を受けることで、履修した学生が次のことができるようになることを目指します。 1. 中学生の成長を大人として見守り、支援することに対する意欲や態度を育成する。 2. 交流を通して子どもの成長を支援するためのスキルを理解したうえで身に付ける。 3. 交流を通して子どもの成長を支援することの喜びを実感し、やりがいを感じる。
授業計画	第1回: 子どもの成長と社会 第2回: 子どもの成長を支える学校と学校外の組織の役割 第3回: 中学生の気持ちと心の不安—自身の体験の振り返り— 第4回: 中学生の不安の克服と将来への期待—自身の体験の振り返り— 第5回: NPO法人「だっぴ」の目的 第6回: NPO法人「だっぴ」の活動 第7回: 「中学生だっぴ」とは何か 第8回: 「中学生だっぴ」の成果 第9回: 「中学生だっぴ」におけるキャストの役割 第10回: 「中学生だっぴ」におけるキャストの役割体験 第11回: 「中学生だっぴ」の準備 第12回: 「中学生だっぴ」の運営 第13回: 「中学生だっぴ」の体験 第14回: 「中学生だっぴ」の振り返り 第15回: 活動報告会の準備 第16回: 活動報告会

中高生だっぴキャスト大募集!!



それぞれの生き方や価値観に触れることで
自分自身のこれからや生き方を考えていく。
今の自分からの、だっぴ。

～中高生が大学生や大人と出会う場～

「中高生×大学生×おとな」の対話をサポートしてくれる大学生キャストを募集しています。
ふだん出会わない人達と、年齢や立場を超えたフラットな関係で、様々なテーマに沿ってお話しをします。
その場にいるひとりとして会話をたのしみながら、安心していただける場を一緒につくりませんか？
事前にコミュニケーションが楽しくなる講座を行い、傾聴やファシリテーション力を学ぶことができます。

8月24日(土) 庄中学生だっぴ

時間：9：00～12：30

会場：倉敷市立庄中学校

8月25日(日) 備前市中高生だっぴ

時間：9：00～13：00

会場：リフレセンター備前

8月28日(水) 吉井中学生だっぴ

時間：8：45～12：15

会場：赤磐市立吉井中学校

▼参加の流れ ※ 事前にガイダンスに参加していただきます。

1.お申込み

QRコードよりフォームを送信してください。
もしくは、メールにてお問い合わせください。

2.キャスト基礎講座

キャストとして参加するうえで基礎となる考
え方や知識などを勉強します。

3.事前ガイダンス

参加する回の学校の情報やプログラムの目的
などを共有します。

4.だっぴ本番！

いよいよ本番！緊張するかもしれないけど、
一日楽しんでいきましょう♪

キ) 成果

参加した学生の多くが、イベント参加から満足感を得ることができた。各参加者の感想は以下のとおりである。

○学生A

今回、早島中学校のだっぴに参加して私が気付いたことは、中学生はその場、中学校とその周辺だけというとても狭い世界の中で生きているということだ。それは私たち大学生や大人たちに対しての態度に如実に表れていて、「よそ者」と感じているのだろうということが表情や発言から簡単に見て取れた。また、将来のことについて具体的にこうなりたい、という確固とした志を持っている子もいれば、そうでない子のほうが多かった。これも、周りの世界がまだ狭いため、選択肢の幅を広げられていないところにあるのだろうと思えた。しかしながら、自分の中学生のころと比較すると、差や違いを決定的に感じることは少なく、予想通りというように感じられた。将来を具体的に考えるのは高校生になってから、今はそのために何となく勉強して、楽しい学校生活を友達と日々過ごしている、といったような感じだ。

(2) 改善したい点

自分に役割を与えられて行うグループトークは初めてだったため、うまく話を回したり、中学生の話を掘り下げたりするのが何よりも難しかった。今回のことで痛感したのは、話を聞こうとするあまり、話を続ける質問等ができなかったことだ。

「傾聴する」という姿勢を大切にすることができたのは良いことだと思ったが、やはり今回の場は中学生の話を引き出す場であったと思うため、自分のトーク内でのありかたを見直すべきだと思う。

(3) 感想

だっぴという活動を通して、現代の中学生に触れられることができ本当に貴重な機会をいただけたと思う。「幼さ」と「無邪気さ」をまだ兼ね備えた中学生は、私に色々なものを与えてくれた。印象に残っているのは、女の子からふと出たひと言だ。「勝つまで続けるよ、負けたくないもん。」今の私がいつの間にか忘れていた諦めない心を思い出させてくれるような、そんな一言だった。大人が経験して持つもの、中学生の少し先に行く大学生の持つもの、まだ広い世界を知らない中学生が持っている、大人や大学生にないもの、だっぴはそれを交換する場なのではないだろうか。そして、彼ら彼女らは、私に「誰からでも学ぶことはある」ということも教えてくれたのではないだろうか。

普段と違う環境、普段と違う人との交流、すべて含めて本当に楽しかった。そして、この授業を受けていなければ得られなかった本当に貴重な経験だった。自分の将来の夢に直結するかといわれたら難しいかもしれないが、この経験は今の自分にたくさんの気づきを与えてくれた。その気づきは、必ず将来の自分に生きていくと思う。これからも積極的にこのような活動に触れていきたいと思っている。

○学生B

私は1月11日に早島町立早島中学生だっぴに参加しました。ガイダンス等で当日参加するキャストの皆さんたちと出会い、交流し、だっぴの活動の練習をさせてもらえる機会があり、そこで現実味が沸き、このイベントが楽しみになりました。

当日、駅に参加するキャストの皆さんが大勢集まっており、ガイダンス等の日に友達もできたことから、あまり緊張せずに会場まで向かうことができました。話してみると授業の一環で参加したのではなく友達に誘われて参加したという人もいて、子どもとの交流の場を自ら見つけていく姿勢に、尊敬の念を覚えました。

会場について、最初は大人の人と交流する機会があったのですが、始まるまでの待ち時間私はなかなか同じグループの大人の方たちに話しかけることができず困っていたのですが、周りを見ると、大人の方たちに積極的に話しかけている大学生や、会話に花が咲いているグループもあったことから私も頑張ろうと思い、残り少ない待ち時間の間に会話をすることができました。大人との交流が始まってからはとても楽しかったです。違う人の今までの一生を聞くことで、自分の人生も何があるか分からないなという期待も生まれたし、失敗しても案外うまくいくのだということも知れた機会になりました。あと、私は一回しゃべれるようになったら割と会話ができるのだと知ることができました。だっぴをする中で、中学生に積極的に話しかけ、話しやすい場を作り盛り上げようとしてくれる大人の方たちの姿に、私も勇気をもらいました。

中学生との交流が始まる前は、大人の方たちと、どんな子が来るのだろうとわくわくしていました。子供たちが来る前に、早島中学校の先生が早島中学校の生徒は熱量があり発言も盛んだとおっしゃっており、私の中学時代と違いすぎて驚きましたがそれによってますます楽しみになりました。だっぴ中は難しい問いもありましたが、中学生の回答を見てから発見することもありました。例えば、「あなたにとって普通とは？」という問いが出された時私は真剣に難しく考えていましたが中学生の回答では「朝起きて夜寝ること」や、鉄道大好きであだ名が鉄ちゃんの子は「各駅停車」と書いており、考え方や見方の違いを感じました。抽象的で考えづらい問題を私たちは頭をフル回転して考えがちですが、シンプルに考えられる力はすごいなと思いました。

「だっぴ」という活動で、大人たちだけでなく中学生からも学べることはとても有意義なことだと思いました。私は自分が中学生の時、あまり何も考えずに好きなことだけして勉強もせずすごしていましたが、中学生時代に様々な職種を持った方たちや大学生とこういった世代間の交流ができることで、自分の将来を少しでも考えられる機会になるのだろうなと思いました。今の中学生は早くから塾に通っていたし、自分の夢をもうしっかりと持っている子もいました。私は未だ自分の夢をぼんやりとしか考えられていないので自分を振り返り将来を考えられる機会になったし、鉄ちゃんを見ていると、本当に好きでそれを仕事にしたいと考えられる趣味を見つけられることに感心しました。私も今年は発見とチャレンジの年にしようと決

意しました。私は大人数の人がいるとしゃべれなくなってしまうのでガイダンスでキャストの方や運営の方と顔合わせするまでとても緊張していたし、この授業を取ったことを不安に思っていました。新しい自分を知ることができ、コミュニティも広がり、人生を冒険している地元が同じ同世代（友達の友達）を偶然見つけることができたし、大変有意義な時間になりました。ありがとうございました。

○学生C

普段の私はどちらかといえば内にこもりがちで、あまり外に目を向けることがない。それを特別悪いことだとは思っていないが、最近ふと「このまま自分は四年間の大学生活を終え、大人になり、社会に出るのだろうか」という漠然とした不安のようなものを覚えた。何か新しいことに挑戦したいと感じている時に出会ったのが「交流による子どもの成長支援Ⅰ」という抽選科目だった。

早島だっぴには様々な人たちがいた。小学校を卒業したばかりの中学生から、会社の社長を退き、今は会長をする傍ら地域のために尽力している年配の方まで、実に幅広い年齢層・経歴の人間が身を寄せあっていた。「相手の意見を否定しない」というほぼ唯一のルールのもと、忌憚なく自分の意見を言い、多くの考え方を聞けるあの活動は、中学生と大学生、そしておそらく大人の方たちにとっても特殊な空間で、またかけがえのない場所だったと思う。

元サッカー選手の男性は、これからは3ヶ月おきに住む国を変えるのだと語った。言葉などはどうするのかと聞くと、「自分の伝えたいことを丁寧な日本語で言えば、案外どうにかなる」という返事が帰ってきた。その人にとっての海外は私が思っているよりもずっと近いものなのだと思った。私にはそのように考えたことはなかったため、新たな視点を獲得できた。その方以外にも、だっぴに参加されている大人の方は皆、新しいことに挑戦しようとしていたり何かに打ち込んだりしていてとても輝いていた。だっぴキャストの研修の際には、「本が好きです」と伝えるとその場にいた人から面白い作品を紹介していただけた。これらはすべてこの活動に参加していなければ得られなかったものである。

グループでの話し合いをスムーズに行うために、私たちキャストは司会のような役目を担った。慣れないことで大変だったが、この経験はこれからの大学生活や社会生活にも生かせる大きな一歩となった。次の話し合いに臨む際のハードルが低くなったからである。中学生たちの自分なりに一生懸命考えた意見を聞くのは楽しく、大人たちの人生経験や考え方の豊かさには圧倒された。時には居心地の良い世界を抜け出して、新しい世界に飛び込んでみるのも大事なのだ分かった。「関わろうとした」という点において、私自身も少しだっぴできたと思う。

これからは相手の言葉だけでなく表情や話し方をよく観察し、「もっと話したい」や「質問してほしい」、逆に「ここには触れないでほしい」など相手が思っていることに気づけるようになっていきたい。

○学生D

1月11日早島中学校で開催された、早島だっぴに参加しました。全部で40近くグループが作られていました。1グループが、中学生3.4人、大学生キャスト2名大人2名の、7~8名で構成されていました。1グループの話し合いは、30分程度、休憩をはさんで、メンバーが入れ替わり、2グループ目の中学生と出会います。

私は、このような会に参加したのは、はじめてですが、とても有意義な時間になりました。内気そうな子、元気そうな子、スポーツをがんばっている子、将来の目標が決まっている子、様々な中学生の男女に出会うことができました。「お正月は、なにをしていましたか？」とか「あなたにとって普通とは何ですか？」などの質問に、それぞれ3分ほどで考えて紙に書き込みます。みんなで「せいの」で、見せ合って話を進めていくのですが、よく、ありがちな、一人がずーっと話し続けるといったこともなく、みんなの考えを公平に聞くことができました。大学生キャストさんや、慣れた大人の方がうまく話を回してくださっていたからだと思います。ただ、もう少し話を聞きたいなと思うこともあるので、そのあたりのバランスはなかなか難しいと感じました。

また、グループでの話は、全体的に和やかで、可もなく不可もなくといった感じで滞りなく進んでいたように感じます。私自身も、流れるように楽しくお話しできたと思います。そんな中で、もう一步踏み込んで、うまく話せなかった子や、こういう会が苦手そうな子に、寄り添える一言が何か言えて、そんな子たちの心の片隅になにかひっかかるものを残せていたらいいなと思っています。

私自身、普段の活動が、スクラップブックというアルバム作りを通して、家に引きこもりがちの子育て中のママさんたちに、託児つきの息抜きの場作りを提供しています。そして、最後は、もってきた写真の思い出を一言ずつお話してもらい、想いを共感する時間を設けています。自分のことを人に聞いてもらい、想いを共感してもらい、また、自分も共感する、そんな時間は、自己肯定感を上げ、自分を認めることで他人にも優しくなれるといういい循環があると信じています。今回の活動も、そんないい循環があるはずです。だっぴするのが、今かもしれないし、1年後かもしれません。また、5年後、10年後かもしれませんが、きっと13歳という年齢からは、まだまだ先と、思っている大学生や、大人たちと話した経験が、だっぴのときに何か小さないい影響があるといいなと思っています。

今回は、とても貴重な体験をありがとうございました。

○学生E

私は「交流による子供の成長支援」の授業を受けるまで「だっぴ」の存在を知らなかった。だっぴに参加するかどうか選択する際に初めはどうしようか迷ったが、いつかはボランティアに参加してみようと思っていたことと教師になるなら子供とかかわることのできるボランティアを試してみるのもいいだろうという気持ちがあり

参加してみようと思った。ボランティアに参加することとなり初めに事前ガイダンスに参加したが、そこではキャストとしてのスキルやボランティアの場でのルールを学んだ。その中で特に大事だと思ったのは話の聞き方だ。教育心理学でも学んだが、人の話を聞くときに大切なのは時折視線を相手の顔に向けることと聞きながらあいづちを打つこと、そして相手の話を受けとめることである。このような聞き方をすることによって、相手が自分の存在に価値を見出すことができ、自分との間に信頼関係を築くことができる。このことを学び、残すは本番を迎えるのみとなったが、本番でこのガイダンスで学んだことを生かせるかどうか不安になった。

本番当日になって、グループに分かれて自己紹介が始まったが中学生はもちろん、キャストも大人の人全員がだっぴの活動に参加したことがある人は一人もいなかった。そのことを知って逆に吹っ切れて、自分から話題を投げかけて会話を進めることにした。本番の場で自分のとった行動でよかった点は3つある。1つ目は会話をとぎらせることが一度もなかったことだ。会話が途切れそうになった時は自分から積極的に質問を投げかけることによって会話を続けることができた。2点目は相手の話を聞くときには相手の顔を見ながら話を聞いたり時折相槌を打ったりすることができていたことだ。この点だけは事前ガイダンスで学んだことを生かすことができていた。3点目はフラットな話し合いをすることができていた点だ。だっぴはフラットな話し合いをすることにより、大人も生徒も同じ立場に立って意見を交換することを重視していた。キャストとして最低限の仕事はできたように思う。悪かった点は2つある。1つ目は中学生たちが自分から話すことや質問をしてることがなかったことだ。こうなってしまったのは自分の話題の振り方に問題があったのだと思う。2つ目は中学生たちが話題についてこられていなかった場面があったということだ。これも話題の振り方によって改善されるように思う。

だっぴに参加して初めは中学生にとってどのような意義があるのかわかっていなかったが、しているうちに大人と話して考え方の幅を広げることがだっぴに参加する意義なのではないかと思うようになった。

今の中学生たちを見て思ったことは自分の中学生のころと似たような感じなのかなあということだ。違っていたのは当時の自分よりも将来のことについて考えていた点と暇なときは基本的にゲームをしていることが多いという点だった。

自分が教師になったときはこの違いにも気を付けておきたい。

(2) 専門教育におけるファシリテーション力育成を目指した授業科目：「対話による社会参画入門(1)(2)」

ア) 概要

地域社会には様々な人が暮らしています。大学から飛び出して、それらの人と話をし、一緒に地域の課題を発見し、解決に取り組んでみませんか。この授業は、教育における社会参画の意義について理解したうえで、社会参画を実践する

ための基礎的な知識や技能について学んでいこうとするものです。教育における社会参画の意義の理解に基づいて、自ら社会へ参画しようとする意欲や態度を身につけてもらいたいと思っています。この授業は、金曜の7・8限の開講となっておりますが、実際の授業の70%は、学外でのボランティア等の活動となります。その時間は、各自が相手との交渉によって決めることとなりますので、授業の実施時間が時間割通りにはならないことをあらかじめ了解したうえで受講してください。

イ) 到達目標

この授業を受けることで、履修した学生が次のことができるようになることを目指します。以下の3点を目標としています。

1. 地域社会が抱える課題を発見し、その原因を探究したうえで、社会の構成員として問題解決に取り組もうとする意欲や態度を育成する。
2. 行政やNPOなど地域社会の問題解決に取り組んでいる機関が果たしている役割等を明らかにするための調査や取材の方法を理解する。
3. 2の調査や取材のために必要な手順や手続きを理解したうえで、実践する。

ウ) 履修年度・学期

1年生～、3・4学期

エ) 履修者

教育学部生を含む16名

オ) シラバス

次ページに掲載。

カ) 学生の活動

本授業においては、学生は自らインターネット等を調べて、地域で活動しているNPOを訪ね、そのスタッフに活動の目的や内容について直接聞き取り調査を行うという課題に取り組んだ。学生が取り上げたNPOは以下のとおりである。

- ・ te. to. te 岡山
- ・ 認定NPO法人ポケットサポート
- ・ たかくら村
- ・ おかやまおしえてネット
- ・ ぱらママ
- ・ おかやまエネルギーの未来を考える会
- ・ だっぴ
- など

講義番号	028192
授業科目	対話による社会参画入門(1)
担当教員(所属)	桑原 敏典(02:教育学部)
学期	2019年度 Q:3学期
曜日・時限	金曜7, 金曜8
単位数	1
教室	教育5207演習室
ナンバリングコード	LCGE1FXZZ1002N
印刷用ページ	https://gs.okayama-u.ac.jp/campusweb/campussquare.do?_flowId=SYW4101101-flow&nendo=2019&shozoku=02&jikanwari=8192&sylocale=ja_JP
科目区分	教育学部専門科目
対象学生	1年次～
必修・選択の別	選択必修
他学部学生の履修の可否	可
連絡先	kuwabara@okayama-u.ac.jp
オフィスアワー	火曜5・6限
学部・研究科独自の項目	関連しない
使用言語	日本語
授業の概要	地域社会には様々な人が暮らしています。大学から飛び出して、それらの人と話し、一緒に地域の課題を発見し、解決に取り組んでみませんか。この授業は、教育における社会参画の意義について理解したうえで、社会参画を実践するための基礎的な知識や技能について学んでいこうとするものです。教育における社会参画の意義の理解に基づいて、自ら社会へ参画しようとする意欲や態度を身につけてもらいたいと思っています。この授業は、金曜の7・8限の開講となっておりますが、実際の授業の70%は、学外でのボランティア等の活動となります。その時間は、各自が相手との交渉によって決めることとなりますので、授業の実施時間が時間割通りにはならないことをあらかじめ了解したうえで受講してください。
学習目的	この授業は、地域社会に参画する意義の理解に基づいて、自ら社会へ参画しようとする意欲や態度、そのために必要なスキルを身につけてもらうことを目指します。
到達目標	この授業を受けることで、履修した学生が次のことができるようになることを目指します。 1. 地域社会が抱える課題を発見し、その原因を探究したうえで、社会の構成員として問題解決に取り組もうとする意欲や態度を育成する。 2. 行政やNPOなど地域社会の問題解決に取り組んでいる機関が果たしている役割等を明らかにするための調査や取材の方法を理解する。 3. 2の調査や取材のために必要な手順や手続きを理解する。
授業計画	第1回：社会参画の意義 第2回：社会参画の方法 第3回：NPOの役割と働き 第4回：NPO活動の実際 第5回：地域課題発見の方法 第6回：地域課題発見のためのワークショップ 第7回：地域課題発見のための技術 第8回：地域課題解決の方法 第9回：地域課題解決のためのワークショップ 第10回：地域課題発見のための実地調査の計画立案 第11回：地域課題発見のための実地調査 第12回：地域課題解決のための実地調査の計画立案 第13回：地域課題解決のための実地調査 第14回：地域課題解決のための社会参画活動 第15回：社会参画活動の報告会準備 第16回：社会参画活動の報告会

キ) 活動の成果

① 学生の地域調査レポート

○ 学生 A

・ 聞き取り対象

Yさん

□□町から引っ越し、〇〇1丁目に住み始めて4、5年経つ。岡大出身で、小学校～大学時代は岡山で過ごした。現在、三女が〇〇2丁目に住んでいる。愛育委員、外国人の子どもの教育、合唱、空き地農園等に携わる。岡山大学地域総合研究センター所属の先生のご紹介で、今回初めてお会いした。2018年度の教養科目「岡山の魅力を世界に伝える活動2018」でも学生からインタビューを受けている。

・ 聞き取り内容

自分の住んでいる地域(津島)の良い点・課題点を、できるだけ初対面の方から聞き取りをする。

・ 目的

地域の良い点・課題点を知る。本講義で自分が取り組みたい内容の参考にする。

・ 聞き取り内容まとめ

<愛育委員>

4年前から継続している。丁は隣だが三女に順番が回ってきて、次の年度に務める人が決まらないため、地域の支部長になった。3年目になってやっと仕事が分かった感じ。先生とは愛育委員の活動を通して知り合った。

平日行事・休日行事で担当がある。

<外国人に日本語を教える>

(ボランティア)西川アイプラザ・公民館にて、おとな(韓国人・中国人)と。基本日本語で会話をするが、自身も韓国語・中国語を勉強中で少し話せる。電子辞書を活用。

(仕事)岡山市教育委員会、岡山県国際交流センターの依頼で小学校に行き、外国人の子どものサポートをする。週1で、今まで20回くらい行った。三津小学校・吉備小学校・大本小学校・三野小学校等。

<合唱>

「鷺羽」に所属。毎週4時間程全体練習。高松・岡山・総社で合唱コンサート出演。

<空き地農園>

4、5年前に近所の人の影響で、ほぼ初心者状態から土地を借りて始めた。元々は田んぼの土地で土壌が硬いため、育てるのが難しい。試行錯誤をしつつ、現在はたくさんの野菜を作っている。作った野菜は、家族で食べたり友達に配ったりしている。

・地域の課題

①学生が深夜までうるさい。特に近隣のアパート。警察に連絡をすることも度々ある。②自転車の傘さし運転、スマホ見ながら運転。思わず注意する。

・聞き取りをして私が感じたこと

とりあえず初対面の方から聞き取りをしてみたものの、講義の課題の本旨と合っているのか疑問である。

私の会話が下手なのか、質問の聞き方が充分でなかったのか…。地域の良い点とは何か、具体的に分からないままだ。課題点は、大学近くの地域の特徴でもある学生の多さに由来する。今回聞き取りをした八川さん以外にも、大学近くに住む人からの学生に対する苦情はよく聞く。地域全体の困りごととして捉えるべきだ。

50分の聞き取りをして、個人的にだが、Yさん自身が人生を楽しんでいる印象を受けた。おそらく、生活で何かマイナスな点があっても、それをマイナスとは思わずに解決されているのではないだろうか。

私の想像力が貧しいため・今まで受動的に生きていたためか、今後自分が地域に対してどういった活動をしたいか、あまり思いつかない…。他の受講者の聞き取り結果も参考にしつつ、自分で考える行為も大事に、本講義に取り組んでいきたい。

○学生B

①「今自分の住む周りのいいところと悪いところ」

良いところ…駅前が発達しどこにでも行きやすくなった。楽しくなった。

悪いところ…あまり思いつかない

良いところに関しては、大型商業施設ができたことや、新幹線岡山駅を中心とする商業施設の賑わいに関係しているだろう。これらに自転車で気軽に行けるところも岡山の良いところである。

②昔と比べて良く・悪くなったところ

良くなったところ…栄えたことで、何でも手に入りやすくなった。

悪くなったところ…周囲に建物が増え、高層化してきたことから日当たりが悪いと感じるようになった。

良いところに関してはさきほどと同様に、何でも手に入りやすくなった所に、やはり利便性を感じるようだ。続いて、悪いところだが、これは都市化の影の部分なのかもしれない。昔ながらの街並みが好きだという人にとっては、都市化の進行は非常に窮屈に感じてしまうのかもしれない。日当たりが悪いというのはもちろん住んでいる場所の立地によるものが大きいとは思いますが、際限のない都市化を戒めるような素朴な一市民の意見として非常に重要であると感じられた。

岡山が都市化していることへの喜びと都市化による弊害を嘆く両面が見えるようなインタビューだった。都市の運営にはこのような市民の率直で素朴な意見を

取り入れ、多くの方が良いと思えるような場所づくりをしていくべきだと感じた。

②中間レポート（NPOの聞き取り調査）

○学生A

・調査対象

A氏

・聞き取り内容

<県立盲学校・地域連携コーディネーター>

現校長先生が、地域と盲学校のつながりをつくるために新設した。連携をしているだけで基本的に学校とは別の組織であり、学校とは対等な関係。今はまだ学校主体で動くことが多い。いま盲学校のニーズが減っているなかで、先生や子どもの必要とするものを探りつつ手助けする。イベント時の交通整理(駐車場整備よりも子どもの安全確保を優先)、校外学習の引率など一対一でつく。

<うのっこ食堂>

子ども食堂。宇野コミュニティハウスにて、第1第3木曜17時~19時。

4年前から始まった。一緒に遊ぶ、食事をとることを目的としている。

<東山つながりキッチン>

子ども食堂。東山公園集会所にて、毎月第3金曜日。「16時~つくる・遊ぶ、18時~食べる・片付け・遊ぶ、19時45分~お迎え・解散」のスケジュール。4年前から始まった。去年頃から同じ操山中学校区で、保護者同士のつながりで広く子どもを迎え入れている。長く子どもに関わっている方と勉強会の開催をすることもある。

<つながり基地ワンド>

子どもの居場所づくり。岡山市立操山公民館にて、毎週木曜日13時半~15時に部屋を設けている。公民館の図書コーナー・調理室・広いホール・ピアノ等も利用できる。

今年4月から始まった。Aさんが小学校の不登校支援員として関わっていた男の子(当時小6今高3)がきっかけ。小学校卒業に伴い、中学生になると家まで迎えに行く等できなくなる。週に1回先生の空いた時間とあわせて、迎えに行つて連れてきて、2時間程勉強をする場所としてワンドができた。結局男の子は中学3年間不登校でいまは家で過ごされているが、親は「勉強は自分のやりたいときにやればいい」と寛容に考えている。Hさんの息子も退学のち不登校になられた。ワンドでは、場所だけ確保して何をするかは決めていない。毎週2人ほど来ている。

子どもにとって過ごしやすい場所であるために、ワンドを大きく宣伝したり大勢のボランティアが来たりすることは望まれていない。静かな人とゆっくり関わ

る方が向いている子どももいる。学校から支援の必要そうな子ども個人に向けて直接パンフレットを渡すようにされている。

<てらこや操山>

子どもの学習支援。操山公民館にて、月1回10時～12時。

操山中学校区の子どもの対象とし、岡山市立操山公民館の館長さんが主体で運営されている。大学生やおとなによる学習支援を目的としている。

<チロバ>

子ども食堂。東山小学校の裏にある教会にて、毎月第1土曜日10-14時に行われる。

・大切にされていること

たくさんのおとなが関わることも大事だが、子どもの特性に合った関わり方をしたい。

・課題を通じて私が感じたこと

自分が母子世帯、相対的貧困に当てはまる家庭で育ったこともあり、子どもの貧困について勉強をしたいと考えていた。今回、岡山県立盲学校でのボランティアを行い、盲学校地域連携コーディネーターとして活動されているAさんと知り合った。ボランティア名簿を拝見した際、子ども食堂を運営されているHさんのお名前を見つけお伺いしたところ、Aさんも不登校や貧困の面から子ども支援を行っていることを偶然知った。子どもの学習支援、居場所づくり等の団体を立ち上げたとのことでお話を伺った。

私の知っている上記以外の学習支援・居場所づくりの団体とも比較して、①子どもが継続的に来なくなる②団体側から子どもを強く呼ぶことができない③支援する人数の不足、の問題点が共通していると感じた。①について、子どもの家庭や健康、学習、精神状況から子どもの気持ちを知るためには、信頼関係を元に継続的に話をすることが必要だ。②とも関連して難しいところではあるが、来なくなった理由とも合わせてコンタクトを取るように行動するのが良いと考える。③については、地域の人材や、子どもと年齢の近い大学生等、幅広い年代のおとなが関わるようになればいい。私のように、関わりたい気持ちはあるが知らないために行動しない層に向けての情報発信も有用だ。しかし、不登校児の居場所づくり等、大人数になると子どもが来づらく感じる、ニーズのない子どもまで来れるようになってしまうとといった弊害も考えられる。子どもの視点に立って、適切なかかわりや情報発信に努めたい。

以上の問題点も踏まえ、今まで自分が知らなかっただけで、地域に子ども支援をしている団体はあることに気付いた。まずは、Aさんにご紹介いただいた「東山つながりキッチン」に1月に参加、操山公民館館長さんともお会いできたため「寺子屋みさおやま」に12月に参加することを予定している。一大学生である自分がこういった団体に参加し、何の役割を果たせるようになるのか、これから行動し考えていきたい。また、子どもがどう感じて行動をとっているのか、子ど

もの気持ちを第一に押し量ることができるようになりたい。一方で、教員免許を取得する教育学部生として、学校から行える支援を模索するのもおもしろそうだ。盲学校でのボランティアも継続しつつ、子どもや教員と関われる機会を探したい。

○学生B

私は教育学部に所属し、教育方法や教育理論、また生徒・児童心理学などについて学んできた。そのため、知識面では様々な教育実践を行うに値するものを得られたし、教育実習でそれらを十分とは言えないまでも発揮できたように思う。しかし、実習ではなかなか得られない経験の中に「学校に来ない生徒、学校にいけない生徒の指導」がある。指導に関する専門性が高く、なかなか研修の身では本格的に参加することができない。その経験を埋めるためには未就学児と触れ合える場が必要となる。私が今回取り上げるNPO法人ポケットサポートは大学生のボランティアや支援員と病気などで学校にいけない未就学児との触れ合いができる場づくりをしている。そういった活動は、未就学児にとっても学習支援を受けることができるし、ボランティア参加者にとっても、上記のような専門性の高い仕事に触れることができ、非常に有意義であるだろう。このレポートでは、NPO法人ポケットサポートの活動の紹介に合わせ、私が先日行ったインタビューに基づき、活動の意義・注意していることなど、現場の声を付け加えることで活動が社会に及ぼす影響を考察し、それに自分がどのように関わっていけそうかを検討していきたい。

2、NPO法人ポケットサポート

NPO法人ポケットサポート（以下ポケサポ）は2015年よりNPO法人化しており、目指す社会像として、「病気を抱える子供たちが将来への希望を持ち、自分らしく暮らせる社会」を掲げて、①学習・復学支援 ②相互交流支援 ③啓発活動・機関連携 を主軸として活動をしている。それでは、それぞれの活動について詳しく述べていく。

①学習・復学支援

病気を患う子供たちは外来通院や自宅療養がどうしても増えてしまい、未就学を招いてしまう。ポケサポでは、外来通院前後、自宅療養中に利用できる学習・ふれあいスペースであるポケットスペースを運営している。この施設は平成30年度より岡山市から「岡山市小児慢性特定疾病児童等相互交流支援業務」としてポケサポが認可を受け、運営している。

場所はポケットサポート事務所（岡山市奥田本町22-2）で水曜日の13時～17時に開かれている。ここには、支援員とボランティアが配置され、未就学児童との交流を行っている。支援員は主に病気を抱える子供の交流支援・学習支援に関わった経験があり、自身も児童・青年期小児慢性特定疾病の療養経験がある者が就く。ボランティアには私のような教員志望の者から、看護師・病棟保育士

を志す人々まで、様々な人が参加している。他にも看護師や保育士の資格保有者の配置や車いす用昇降機も設置されており、安心してサポートを受けられるようになっている。

相互交流支援では、支援員・ボランティアと交流し、宿題や一緒に遊んだりする活動や同世代の子供たちと交流する場が設けられている。また、支援員による悩み相談も受け付けられている。このような支援に加え、岡山市の小児慢性特定疾病自立支援員、保健師等と連携し、子供一人一人に応じた支援を検討していく活動も行っている。大学生が参加する場合、研修を行ったり、フォローアップゼミや日々のボランティア報告にアドバイス回答をするなどの支援もあり、学習支援ボランティアの質の向上に継続的に取り組んでいる。

②相互交流支援

ポケサポでは春夏秋冬の季節に応じたイベントを開催し、子供たち同士、子供と支援員の交流を行っている。

③啓発活動・機関連携

ポケサポではシンポジウムなどを行い、病気の子供たちの学習支援や復学支援などの啓発を目的とした講演会や大学生ボランティア育成などを積極的に開催している。

主に以上のような活動を行っている。

私は特に①の活動について興味を持ったので、「声掛けや活動を行う上でどんなことに気を付けているのか」「なぜポケサポを設立しようと思ったのか」をホームページ上からポケサポの代表者であるM氏に尋ねた。前者に関する回答は、「就学支援が単なる勉強に終わってはならない。」であった。M氏は自身が慢性疾患を罹患し、義務教育のほとんどを病院で過ごしたという経験を持っており、病気の子供たちが抱える課題は物理的なものから心理的なものまで幅広いという考えだった。課題の幅広さゆえに、M氏は本人のやりたいことを尊重し、子供に合わせたサポートを心掛けているようだ。ただ単に勉強が出来なくて悩む子供だけではなく、周りから置いて行かれているという疎外感や入院を繰り返す中で貴重な時間を失ってしまったという喪失感に関して思い悩む子供もいる。そのため、関わりを続ける中で上記のような心掛けで信頼関係を築くことで、子供それぞれのパーソナルな部分を見つけ、それを支える支援を行うことに注意し、単に就学支援で終わらせない重層的な支援を目指しているようだ。

後者については自身が病気で未就学児だった経験を持っていると先ほど述べたが、そんな生活を変えたのが院内学級だったそうだ。「院内学級では自分と同じように闘病生活を送っている仲間がおり、一人じゃないと思うことができた。」と氏は語った。その後、中学二年生のころに入院生活がひと段落し、高校、岡山大学へと進学した。M氏は岡山大学病院に入院していたという縁もあり、大好きな院内学級へ何か恩返しができないかと考え、ボランティアを始めたそうだ。現在のポケサポと同様の就学支援や子供たちとの触れ合いを通じて「自分の体調と

向き合ったうえで、どうすれば病院の子供たちにずっと関わり続けられるだろう」と思うようになったそうだ。ポケサポはこういった意識の下で、「子供たちに合ったサポートをできるように」設立されたようだ。「病気だから」という理由で自らの夢をあきらめるのではなく、少ないチャンスの中でも精いっぱい夢ややりたいことを追い求められるようなサポートをポケットサポートの活動で補おうとしているとのことだった。

ポケサポは活動それ自体は未就学児に対する支援がメインであるため、広義で社会変革に直接つながる活動とは言えないかもしれない。しかし、活動に関わる人々の意識改革、また未就学児たちの意識改革には大いに意義のある物であるだろう。M氏は自身の経験を活かし、ポケサポの活動を運営している。つまり、未就学児であった自身が未就学児を支援できる活動を整えるようになるという再生産活動のサイクルを作ることにこそ社会との関わりにおいて意義のあることではないだろうか。そのサイクルに教育従事者、医療従事者の参加があることで、分野を越えたつながり、又は、それに伴う包括的な支援が行えるようになるのだ。私は教育従事者としてこのサイクルに参加できると考えている。大学生活で足りないものは現場での指導であると考えられる。現場に赴くことでしか培うことができない能力はポケサポのような活動でこそ培うことができるだろう。また、現在学校のクラスには1人から2人の発達障害児がいるといわれており、個に応じた指導をクラス全体で行うためにも、役立てることができるだろう。このように再生産活動の定着により、社会そのものの変革に関しても、未就学児の支援を通じて、未就学児に対する世間の目線を少しずつでも変えていくことを可能にすることができるだろう。

M氏の熱意と活動意欲は必ず未就学児支援を変えていくだろうと感じた。活動の結果生み出される就学支援のサイクルには自分を含め関係各所の参画が為されることでより有意義なものになるだろう。

③最終レポート（活動に参加）

○学生A

《児童から》

- ・お互いに名前を知っている/顔なじみの児童どうしもいるようだった。
- ・鬼滅の刃はやっぱり人気
- ・後片付けへの誘導

→積極的に取り組んでくれる子がいる一方で、全く片づけをしない子もいた。つながりキッチンの方針に沿って、どう声掛けすべきか迷った。

・改めて考えると当然だが、おとなと子どもは食べる量が違う。子どもの年齢や性別に応じた適切な配膳ができなかった。配膳前に、どれくらいの量を食べられるのかそれぞれに尋ねればよかった。

・自分から楽しんでおはなしめいろに取り組んでいる児童がいた。遊びと勉強がこうも楽しくつながるのか、と驚いた。

・最初は児童から話しかけてくることはほぼなかったが、私から声をかけ、一緒に何かすることで徐々に打ち解けられた。教育実習や他ボランティアでも感じていたが、自分から声をかける必要性を強く感じた。

《ボランティア参観者から》

・東山つながりキッチンに着いて最初に、原さんから「つながりキッチンの児童や参加者について知ってから参加するか、それとも知らずに(先入観をもたずに)参加するか、どちらがいいか」と尋ねられた。どちらの面でもメリットはあるが、何も知らずに参加したとして、無意識に児童等を傷つけてしまう可能性にそこで初めて思い当たり、自分の思慮の浅さを感じた。

・ボランティアの青木さんと社会参画入門1のレポートの際にお話しお伺いしていたことだが、もともとは、貧困家庭の子どもを対象に支援を考えられていたそう。今は、すべての子どもが参加できる形になっている。おそらく貧困家庭の子どももいるだろうと思いつつ接していたが、特に分からなかった。私が初参加だった・貧困は目に見えにくい、といったことが関係しているのだろうか。

・子どもの学校生活/家庭生活がどのようなのか、知れるように質問をしていた。

・公民館全体の片づけを子どもたちにも手伝ってもらっていた。おとなだけでは手の足りないところを子どもにも手伝ってもらうことで、時間通りに済ませられていた。

《保護者から》

・東山つながりキッチンが、保護者同士のつながりの役目も果たしていた。母親同士のコミュニティができていた。

・すべての児童の保護者が来ているわけではないが、幼児の保護者の参加率は高かった。

・児童よりもむしろ保護者の方が、大学生に積極的に声をかけてくださった。

《設備から》

・つながり図書館の本を見て、充実していると感じた。地域からの寄付で本が集まった、と掲示されていた。

・地域の拠点として公民館をうまく活用されていた。一軒家のような外観/内装で、気軽に外に出て遊ぶことができ、児童が落ち着いて過ごせるように感じた。

○学生B

今回、初めて「子供食堂」に参加した。

行く前までのイメージでは、何らかの事情により家庭で食事ができない子供に食事を与えるものだと思っていたのだが、実際は学童保育のような役割を果たしていたことが分かった。しかし、学童保育とは言いながらも、地域によって運営

がされているところに「子供食堂」の重要性を感じた。地域社会における付き合いが少なくなっている現状において、「こども食堂」が地域連携の実現を進める上でかなり重要だと考える。参加していた人は「こども食堂」とは言いながらも親も参加しており、親同士のコミュニケーションをする上でも重要な役割を果たしていた。

また、こういった側面だけでなく、教育に果たす役割があった。というのも、参加者の中には学生のボランティアや、障害を持つ高校生が参加していた。今回はいなかったが、中学生も参加しているようだ。私が参加したのもボランティアという形だが、こどもたちの学校に対する思いを聞いたり、勉強を教えてあげるといったような光景もよく見受けられた。私自身も高校生と話をしたところ、不登校に悩んでいるという話を聞くことができた。このように「こども食堂」は未就学児に居場所を与える側面があることが分かった。というのも、「こども食堂」の終わりに、原さんが「また来てね」という言葉を彼にかけていて、上記のような側面を強く感じたからである。

以上のように、地域社会における連携を推進するような側面と、未就学児に居場所を与えるという二つの側面を持っていた。もちろん、それぞれに意味があるが、これらの側面が公的な教育と連携をすることで、広範囲に教育空間を形成するようになるのではないだろうか。これも「こども食堂」に参加して初めて得られる意見である。そのため、様々な人が参加して初めて、地域全体を包み込むような教育・人間同士の連携を果たしていけるようになると思う。自分が参加した経験を含めて、教育に従事する中で様々な人にこのような経験を伝えていきたい。

(2) NPOによる特別講義

① 日時 2019年12月11日(水) 1・2限(8:40~10:50)

② 場所 岡山大学教育学部講義棟2階5202講義室

③ 対象 生活科授業開発受講生

④ 目的 NPO法人岡山市子どもセンターの取り組みを通して、NPOなど民間教育組織が子供の成長支援のために行っている活動の様子を理解し、教師としての力量形成に生かす。

⑤ 講師

NPO法人	岡山市子どもセンター	代表理事	美咲	美佐子	様
	同	副代表理事	道仙	八代己	様

⑥ 授業の概要

授業では、美咲氏と道仙氏に岡山市子どもセンターの設立からのあゆみや、現在の取り組みについてお話しいただいたのち、久保田氏に、「子どもの森」での活動の映像を紹介していただきながら、子供の自然の中での遊びの特徴やその支援の在り方について説明していただいた。

⑦ 授業の成果

授業では、多くの学生が熱心に話を聞き、講演の後のディスカッションにおいても積極的に自分の考えや疑問点を述べていた。学生の感想については、以下に掲載しておく。

同じ活動の感想と言いつてもグループによって、様々な視点からの意見があり、視野が広がった。

遊びの中で子ども同士、子どもと大人、子どもと地域のように多くの関わりと子どもが活躍できることにおいて、より意味深い遊びになると思った。

レパリーの中で、制限が少なく、子どもがやりたいことをやりやすい環境を提供する必要があると思った。

子どもがやってみたいと思ったことをできる環境を整えることが大人に求められると思った。環境は場所や材料、時間だけでなく大人も含まれると考えた。大人が子どもに自由に遊んでまなさいと離れるのではなく、大人自身が子どもの遊びに介入することで遊びがますます面白くなるのではないかと考えた。生活科の学習でも、教師が子どもの活動に積極的に関わることで、学びが深まっていくのではないかと。子どもへの関わり方、介入の仕方を考えていきたい。

子供が遊んでいる最中にホーッとしている時間があり
その時間は無駄ではなく、創造力などを働かしている
大切な時間であると感じました。またそのような子供たちに
遊んで来なさいと言うのではなく待つことも大切であると思
いました。ボランティアに参加して子供たちと積極的に
関わって外で遊ぶ楽しさを共有したいです。

グループでの質問の時に
子どもの危険について、「リスク」と「ハザード」の違いに
ついて教えてもらったのが興味深かった。

「リスク」の方が子どもにとって必要で、「ハザード」(遊具の不備、
遊ば高さetc...)に注意して遊べるように、大人が
配慮することが大切だと思った。

また遊びは「何で遊ぶ」ではなく、「どう遊ぶか」に
重点を置くべきだと思った。

1人のぼーっとする時間もその子にとっては「あそび」
であると聞いて、私はそういう子どもの時間を
大切にしなければいけないなあと思いました。一人で
いる子に無理に集団あそびをすすめてもダメな
んだと新たな視点をもつことができました。

今日の発表について、知らぬ... ことばかりでした。
おかげでフレイパークやNPO法人など兵庫にあって
すてきなところばかりかたと思えました。
たくさん話をする中で、現代の親は過保護だからと
感じたし、これからの自分も変えたい... かなと思えました。
危険にさらされて初めて危険と身を感じたり、どうしたら
いいのかな強く判断する練習にたたりすると考えたからです。
こんな活動は責任がとまらぬ学校ではしづら... と
思いますが、これには責任があるということが具体的に知っておもしろ
かったです!

子ども達各々に各々の遊びがあり、見る(ホーッとする)ことを
含めて子ども達にとって大切な遊びなのだと感じた。
また、仕事をする母親達が増えているなかで、地域で子育て
をする環境づくりはとても大切だと感じた。

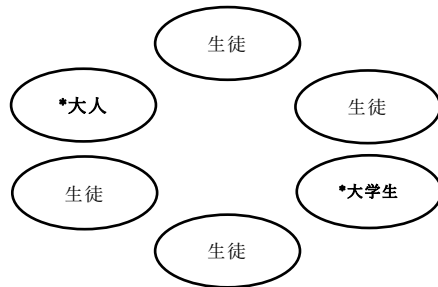
(3) 附属中学校における「中学生だっぴ」

- ① 日時 2019年10月9日(水) 12時30分~16時
- ② 場所 岡山大学教育学部附属中学校
- ③ 参加者
中学生 175名、キャスト 52名、おとな 41名
- ④ 「中学生だっぴ」のねらい

中学生だっぴとは、中学生が多様な世代の人々や生き方と出会い、語り合う場である。人生の選択肢やそれぞれの価値観を知り、自己や他者を尊重して選択を行う。直近の進路選択のみならず、未来の岡山を担っていく人材の育成を目指している。

⑤ 内容

中学生4または5人（生活班）＋大学生1人＋大人1人からなるグループ内で、働き方や生き方などについてテーマに沿って自由に話しあう。



1回目：大人A・大学生A
2回目：大人B・大学生B

- 11：00 スタッフ到着・受付会場準備（プロジェクト・マイク・長机）
- 12：15 キャスト到着・受付など
- 12：30～13：10 参加者 当日ガイダンスおよびアンケート実施
- 13：10～13：30 参加者 昼食
- 13：35～14：25 **5限 だっぴ①**
ファシリテーター挨拶・ルール説明・アイスブレイク
トーク1（自己紹介・お題1・2・3）
- 14：35～15：25 **6限 だっぴ②**
トーク2（自己紹介・お題1・2・3）
感想などの共有、ファシリテーター挨拶、クラス集合写真撮影
- 15：35～16：30 ふりかえりシートおよびアンケート実施、諸連絡

⑥ 感想（

（NPO法人だっぴ作成の報告書より抜粋）

- ・今日は自分では想像つかないことをたくさん感じました。普段、関わることのない人達と話しをして、これからの人生を歩んでいくのに良いきっかけとなった。まずは、自分のしたいことをするために、日々、努力する。
- ・中学生の話を知っていると、自分が中学生のときにどんなことを考えていたか思い出してきた。あの頃の夢を彼らが思い出させてくれ、改めて夢に突き進もうと確信できた。
- ・中学生の子どもの考え方や思いを知ることができてよかった。様々な考えや価値観があり、多世代交流の大切さを改めて感じた。

- ・自分とは異なる意見をきくと同時に、自分の考えを整理する場にもなりました。自分のためにもなるよい会でした。参加してよかったです。
- ・普段話すことのない中学生と話すことができ、とても楽しかった。最後の感想共有で「楽しかった！」と笑顔で言ってくれた子がいてこっちまで嬉しい気持ちになれました。参加してよかったです！
- ・中学生は本当に多感な時期なんだと悟った。何かに本気で取り組んでいる人、何をすればいいのか分からない人、色んな人がいたけど、みんな違ってみんないいなと思った。
- ・中学生の意見が新鮮でおもしろかった！大人の人の生き方がすごくて、自分も勉強になった。
- ・普段見えてない事が見えてとても面白かったです！！とにかく面白いなあと思いました。中学校で、中学生と大人の方と深い話ができる場がとてもいいです。
- ・もっと勉強一すじって感じだと思ったけど全然違った！驚いた！活発で、聞くも一どに入るとずっと聞いてくれる、良い子たちだな。
- ・生徒の頭の回転が早く、グループの最後の方から、進行やまとめを自主的に行っていて、関心してしまった。
- ・自分の発言を心にとめてくれた生徒がいて、うれしかった。いい意味で、大人な考えを持った生徒が多く、おどろかされるばかりだった。

⑦ レポート

学生A

○中学生に対するイメージが変わった

だっぴ前：賢い、真面目そう、グループのゲストさんや大学生の期待する答えを出しそう、グループの雰囲気がかたくなならないか不安

↓

だっぴ後：中学生という等身大の姿を見たような感覚、クラスが仲良い(クラス内でグループごとに分かれている感じではなく、1つのクラスとして仲良い印象)、心を開いてくれている感じ

○中学生からの質問が嬉しかった

→これまで何度か中学生だっぴにキャストとして参加してきたが、中学生から質問してくれたことはほぼなかったため嬉しかった

→大学生のキャストが必死になってグループを回すというよりも自然と話が進んでいる

個人的にキャストとしての役割を気負いすぎることなく楽しい気持ちで参加することができた

○大人の方との連携

→今回のだっぴでは各グループに中学生4~5人、ゲスト1人、キャスト1人というイレギュラー(普段は同じぐらいの中学生に対してゲスト2人、キャスト2人くらい)

→オリエンテーションの段階でどうするか相談できていたり、心配事を解消したりしていたため、キャスト1人でも楽しく参加することができた

○中学生の意欲が均等だったように感じた

→附属中だっぴを行うにあたって事前にだっぴ実行委員をつくっていたらしい

→(委員の働きかけもあってか?)だっぴに対する意欲の個人差があまりなかったように感じた

○話が逸れてしまったときの対応が難しかった

→楽しい雰囲気の話ができたのはよかったが、その楽しさがトークテーマとずれたところで盛り上がった時があった

→話を戻そうとしたり、質問しようとしたりしてもなかなか難しい雰囲気になってしまい、トークテーマに沿った話をするができなくなってしまう

→何度かキャストとして参加してきたが、未だに難しいと感じることの一つだと改めて思った

○最後に中学生がもう少ししたかったと言ってくれたのが嬉しかった

学生B

私がだっぴに参加するのは附属中学校だっぴが3回目でした。とはいっても、はじめの1.2回は大学生以上が参加する”教育学だっぴ”と”校長先生だっぴ”だったため、本来のスタイルのだっぴに参加したのは初めてでした。しかも今回はグループの会話のサポートをする”キャストとして参加したためこれまで参加しただっぴとは全く違うように感じました。

実際にキャストをしてみて、とても難しい役割だなと思いました。どうやら会話のバトンをうまくつなぐことができ、この場がよりよいものになるのだろう。こんなことばかり考えていました。しかし、附属の生徒たちは私が頑張っで引っ張らずとも自分から話してくれました。経験者の方から聞くと、このようなケースはまれなようですが、身構えていた私からするととても助かりました。しかし、2年後教師になろうとしている自分の力不足も同時にひしひしと感じました。自分が教師になったら自分のクラスをまとめていかなければなりません。今の自分に到底できるとは思いませんでした。その代わりとってはなんですが、人の話を聞くことに重きをおくよう心がけました。相槌をうったり話す人の目をみたり、質問してみたり。みんなが話しやすい雰囲気を作ること为目标としました。

正解のない話を社会人、大学生、中学生という年齢がバラバラの人たちが集まってするという貴重な体験は予想以上に心地よく楽しいものでした。話しているうちに自分と相手との共通点や相違点を見つけたり、掘り下げると新しい事実を

発見したりと時間はあっという間でした。自分の先輩である社会人の方のお話をするとこんな生き方もるんだということを学ぶことができました。何歳になっても新しいことに挑戦しておられる方とお話して、自分もまだまだこれからだという意識がもてるようになりました。だっぴは普通なら出会うことのないような人と出会える場です。その人と出会ってさまざまな人と話す中で、自分を見つめ直したり、新しい自分を発見できる点がだっぴの魅力であると感じました。初めて会う人と本音で話し合うって少し難しいし不思議な感じがしますが、自分にはとても心地よかったです。

来月 11 月からはいよいよ教育実習が始まります。今回のように児童とラフな関係で対等にしゃべる、関わるというのはなかなか難しいとは思いますが、児童に正面から向き合う 1 カ月にしたいです。そしてまた実習が終わったらだっぴに参加したいと考えています。

(4) 外部人材との連携による高等学校授業開発・実践

①概要

NPO 法人 YouthCreate の元代表である原田謙介氏と本学の学生が連携をして、高等学校における主権者教育プログラムを開発し、実践した。

②日時

授業実施日 2020 年 1 月 20 日 (月)

③場所・対象

岡山県立倉敷中央高等学校第二学年

④内容

主権者教育

⑤成果

次ページに作成したワークシートの一部を掲載しておく。

組 番 名 前 _____

候補者を選ぶ

選挙公報を読んで項目について良いところ、気になったところを記入。
 その候補者ごとにそれぞれの項目の評価を○、△、×でつける。(裏の情報の見方も参照)

		良いところ	気になったところ	○,△,×
政策	小川 ゆかり			
	いとう 浩			
	玉田 あつり			
人となり	小川 ゆかり			
	いとう 浩			
	玉田 あつり			

■候補者演説を聞いた感想を記入しましょう(公報を読んだ時と印象は同じか、違うか等)

■周りの人と意見交換をして気づいたことを記入しましょう

情報の見方 情報をどのような視点で考えるか

① ▼政策

自分とのマッチング

主体的に候補者を選ぶ！

自分の関心のあること、気になることを考えて、そのことについて主張している候補者を探してみよう

② ▼政策

現状との関連性やオリジナリティ

具体的な政策の内容を見る視点は、
 ①社会の現状を正確に把握している政策か
 ②他の人とは異なる着眼点があるか
 など

③ ▼人となり

候補者の当選への想い

なぜ当選したいか、当選したら何ができるか？
 そのために見ることは、
 ①経歴や過去の経験
 ②なぜ立候補しているのか
 など

④ ▼人となり

実際の候補者の見方のイメージ

演説をチェック

→候補者も自分の見せ方を戦略的に練り、アピールしている
 ※投票で演説を行います。

VI. NPOにおけるインターンシップの企画・実施・効果の検証

1. 長期インターンシップ

① 目的

地域や社会とかかわりながら学ぶ学習の支援を通して学校の教育改善に寄与しているNPO法人みらいず works でのインターンシップを通して、教員のファシリテーション力育成のための調査研究を補助する。

② 日時

2019年9月3日（火）～26日（木）

③ 場所

NPO法人みらいず works（新潟県新潟市西区坂井砂山2-18-2）

④ 派遣学生

教育学部学校教育教員養成課程小学校コース社会科教育専修 4年生
02428106 藤澤里奈

⑤ 活動内容

みらいず works のインターンシップ生として、中学校や高等学校でのキャリア教育の授業の視察、出前授業の打ち合わせ同行・準備・運営、出前授業に参加する大学生に対しての事前ガイダンスの実施、みらいず BOOK（みらいず works 発行の高校生向けマガジン）の作成、教育関係者向けのファシリテーション講座などの参加など

⑥ 参加動機

インターンシップ先のみらいず works は、ファシリテーションを手法にしながら、地域に学校を開いて、子どもを育てている。私は普段、岡山市を拠点に活動するNPO法人だっぴにて、中学生や高校生にむけて、ファシリテーションを手法にキャリア教育活動を行っている。また、卒業論文にて、教師の資質・能力としてファシリテーションに注目して研究を進めている。そして、ファシリテーションを取り入れて、学校内外での教育活動をより行っていきたいと考えている。そこで、みらいず works を軸として、学校教育の現場でも積極的にファシリテーションを取り入れている新潟で活動しながら視察することによって、ファシリテーションによる教育の可能性を見ていきたいと考えた。

⑦ インターンシップを終了して

インターンシップによって、「これからの教育に対する気づき」と「自分自身に対する気づき」の主に2つの気づきがあった。

1つめの「これからの教育に対する気づき」は、学校教育と学校の外から支える教育が完全に切り離されるわけではなく、ボーダーレスであった方がいいと思ったことだ。みらいず works では、ただ単に授業のプログラムを学校に提供しているというわけではなく、学校の先生方自身ものファシリテーション能力、探究とは何か？を考えながら、授業のプログラム開発を行っていた。そのため、学校の先生だからこそ持っている視点、学校の外にいるから提案できる視点を柔軟に取り入れることができ、地域全体で子どもを育てていくんだというのを感じられた。だからこそ、学校が、みらいず works から手を放しても、学校が地域を巻き込んで、子どもを育てる土壌ができていくのではないかとという期待も持てた。これから、学校が子供を育てるために行っていくこと、地域が子供を育てていくために行っていくことは変わっていくんだろうなという風を感じた。

2つめの「自分自身に対する気づき」は、社会の流れ・教育の流れの変化は切っても切り離せないからこそ、高くアンテナをたて、常にアップデートしていかなければならないと思った。今まで学校教育に育てられてきて、目には見えない当たり前を持っている。しかし、そのあたりまえを疑う目を持ち、これからの教育に何が必要なのか、何はいらぬのかというのを普段からしっかり検討してゆく必要があると思った。また、そのために、学校教育の視点からだけではなく、NVC・ティール組織など、学校教育だけではない視点からも勉強をしておくことによって、教育を考えなければならぬと思った。そして、本インターンシップを終えて、自分が今後どうゆう風に教育に関わっていきたいのかという将来ビジョンに向き合あうことができた。

2. 短期インターンシップ

① 目的

自然の中での子どもの遊び支援を行っているNPO法人岡山市子どもセンターの活動を支援することを通して、子どもの成長を支援するファシリテーション力育成のための調査研究を行う。

② 日時

2019年12月

③ 場所

こどもの森（岡山市北区学南町3丁目6-1）

④ 派遣学生

教育学部学校教育教員養成課程小学校コース社会科教育専修 4年生

横田佳奈

⑤ 調査報告（横田佳奈『地域社会における子どもの成長に関する支援—岡山市内のNPOの活動を事例として—』2020年1月岡山大学教育学部提出卒業論文より引用）

・おかやまプレーパークでの実地調査日（計7日間）

2019/12/5

2019/12/7

2019/12/19～22

2019/12/25（クリスマス会実施）

・（報告）

筆者は、学生ボランティアとして、プレーパークの活動へ参加した。おかやまプレーパークにおいて、ボランティアやプレーリーダーに求められることは、以下の点である。

① コミュニケーション（安心の存在であること）

- ・挨拶をすることで、誰もが遊び場に入りやすくする。
- ・赤ちゃんを抱えて困っているお母さんに声をかけるなどして、遊び場ではスタッフと保護者の役割交換をする。
- ・色々な考えの人がいることを把握し、表情、言い方、聞き方には気をつけて自分の意見を伝えるようにする。
- ・どんなことに困っているのか、仕草や発言から読み取る。

② 環境づくり（繋ぐ）

- ・人の会話が生まれる場づくりをする。例えば、ベーゴマ、七輪、リヤカーなど人の輪ができるものを設置する。

③ 環境づくり（危機管理）

- ・リスクとハザードを理解した上で、コミュニケーションやデザインで危険を防ぐ。
- ・救急箱の確認を行う。
- ・連絡先の確認を行う。

④ 環境づくり（遊び）

- ・子どものやってみたい気持ちを引き出しながら一緒に遊ぶ。
- ・使っていいものは見えるように設置する

- ・一人になれる場所や逃げられる場所を作る

⑤遊び観をもつ

- ・遊びを楽しむ。
- ・自分の物差しではなく、子どもの物差しでみる。
- ・子どもの声をきく。

活動の際は、多くの人が集まる場であるからこそ、コミュニケーションをしっかりと行い、遊具の設置や危機管理など様々な視点から環境づくりを行うよう心掛けた。また、子どもと同じ目線に立って、遊びを通して子どもと関わることも重要である。

また、以下のような流れで活動を行った。

9:55～ スタッフミーティング

10:00～ 準備

10:30～ 来た人と関わる

12:30頃～ 昼食

13:00 来た人と関わる

16:00 片づけ

16:45 スタッフミーティング

プレーパークでは、七輪で近所の人を持ってきた餅を焼いたり、子どもと一緒に穴を掘ったり、卓球をして遊んだ。子どもと同じ目線に立って遊ぶだけでなく、保護者や地域の大人ともコミュニケーションをとることができた。

こどもの森では、サッカーやキャッチボールをすることは禁止となっているが、プレーパーク内で、新聞紙を丸めてキャッチボールをする場面もあった。見守ってくれる大人がいるからこそできることである。球技が苦手の筆者は、小学生に投げ方のコツを教えてもらい、少し遠くまでボールを投げられるようになった。学校現場であれば、子どもの手本となる立場で、教えることが多いが、プレーパークでは子どもから学ぶことも多くあった。

プレーパーク卓球のようす



(筆者撮影)

プレーパークでの卓球は、通称プレパ卓球と呼ばれ、親しまれている。手作りの卓球台を使うため、思いがけないところで球が跳ねたり、風にあおられたりと、公式の卓球とは違った難しさがある。常連の小学生は、木を削ってオリジナルラケットを作っている。子どもたち自身でルールをつくれるのも特徴的である。

また、12月はクリスマス会に向けて、準備が行われた。子どもたちと一緒にクリスマスツリーの飾りつけをしたり、サンタクロースが座る椅子をつくったりするとともに、古くなっていたおままごとの家を新しいものにつくり替え、クリスマス会で子どもたちへお披露目とした。

古いおままごとの家



(筆者撮影)

遊具は、廃材やホームセンターで買ってきた木材が使用されている。プレーリーダーが、遊具を作る時や設置する時に意識していることは、「近道を用意すること、穴・狭いところを作ること、完成しすぎないこと」であるという。

つまり、子どもが遊びを楽しんでいると感じるときは、競争、運、模倣、眩暈のいずれかに遊びが分類される時である。遊具を作る時も、4つの要素を取り入れることを意識するとよい。例えば、おままごと（模倣）の家も、中に入れるだけでなく、上に登れる（眩暈）などの要素を取り入れている。

クリスマス会当日は、地域の人がサンタクロースとなり登場し、子どもたちへお菓子のプレゼントが渡された（地域の人々の自費）。親子50人程度が参加していた。イベントでは、サンタクロースへの質問コーナーや、プレーパークからの手作りクリスマス飾りのプレゼント、コーンスープの提供やべっこう飴づくりが実施された。

べっこう飴づくり



（プレーリーダー撮影）

今回の実態調査では、以下の3点が明らかになった。

①都市部の子どもたちにとっての遊び場が確保されている

都市部の子どもたちの実態として、遊ぶにも遊び場がないという現状がある。

…（中略）…子どもの遊び場が減っている現状の中で、プレーパークは、都市部の公園の中で、子どもが自由な遊びや、野外体験を行い、挑戦や成功体験をすることができる場となっている。

…（中略）…子どもは遊びを通して、達成感や効力感を得て、成功感や自己充実感が生まれるという体験を生み重ね、チャレンジ精神や向上心や努力心を育てていくということである。プレーパークでは、ベーゴマや大きな木に登ることなど、子どもにとって難しい課題に挑戦する機会が多いため、様々な失敗体験や成功体験を通してチャレンジ精神が育つと考えられる。

②異年齢の子どもたち同士が仲間集団を形成する場になっている

プレーパークには、乳幼児から中学生、高校生までが遊びに来ている。そのため、異年齢の子どもたち同士で、グループを形成したり、母親に代わって、中学生が赤ちゃんの面倒を見たりする場面が見られた。…（中略）…つまり、子どもたちは集団遊びの中で、指導力、協調性、責任感、自己抑制、積極性などの社会性の基礎を身につけるが、異年齢の集団になると、社会性を身につける機会はさらに増える。異年齢集団の中では、年下の子どもは年長者のまねをすることで、成長していき、年長者は、指導性や責任感を身につけることができる。学校の学級集団の中では、異年齢集団はつくれないため、プレーパークで、異年齢の仲間ができるということは、子どもの新たな一面を見られる機会となっている。

③子どもたちだけでなく、子育て世代の親や近隣住民が集う場（みんなの居場所）になっている

プレーパークは、子どもだけでなく、プレーリーダーや子育て世代の親、ボランティアスタッフや地域の人など、常に大人がいる環境である。大人が子どもの話し相手となり、子どもを見守る存在となっているため、子どもは安心してプレーパークで過ごすことができる。また、大人同士のコミュニケーションの場にもなっていて、子育ての悩みを共有したり、近所の人が持ってきた手作りお菓子を囲んで話をしたりできる。大人にとっても過ごしやすい場となっている。クリスマス会のサンタクロースのように、近所の人ボランティアとしてイベントに協力してくれることも多い。プレーパークは、子どもだけでなく、スタッフや親、地域の大人の協同により成り立っている。

Ⅶ. 現職教員と大学生・大学院生が交流するイベントの企画・実施・効果の検証

1. 学校とNPOの連携に関する研修会

(1) 日時 2020年1月11日(土) 15時～17時

(2) 場所 岡山大学教育学部講義棟2階5207

(3) 講師 岡島春恵氏(認定NPO法人カタリバ)
(カタリバスタッフとして、雲南市の高校魅力化プロジェクトに取り組み、市内の二つの高校の事業をコーディネート)

(4) 目的

新学習指導要領のもとで、「主体的、対話的で深い学び」が求められ、探究が学習のキーワードになっている。どうすれば効率的な探究か可能になるのか、雲南市での取り組みを事例に参加者と考える。

(5) 成果

現職教員、大学教員、大学院生など20名程度の参加者があり、学校とNPOの連携に関して充実した議論をすることができた。

岡山大学教育学部主催

より効果的な探究のあり方を探る
学校とNPOの連携
に関する研修会



新学習指導要領のもとで、「主体的、対話的で深い学び」が求められ、探究が学習のキーワードになっています。どうすれば効果的な探究が可能になるのか、雲南市での取り組みを事例に参加者の皆さんと一緒に考えてみましょう。

- | | |
|----|--------------------|
| 日程 | 2020年1月11日(土) |
| 時間 | 15:00~17:00 |
| 会場 | 岡山大学教育学部講義棟2階5207 |
| 講師 | 岡島春恵氏(認定NPO法人カタリバ) |

(講師紹介)
岡島春恵氏

カタリバスタッフとして、雲南市の高校魅力化プロジェクトに取り組み、市内の二つの高校の魅力化事業をコーディネート。

お申込み：岡山大学教育学部桑原敏典研究室

Mail kuwabara@okayama-u.ac.jp

住所 岡山市北区津島中3-1-1(詳しくは大学のHPをご覧ください。)

お車でお越しの際には駐車料金が必要です。

「学校教育」×「社会教育」



小中学生

- ・UNNAN学びサポート事業
- ・キャリア・パスポート事業
- ・キヨロバス事業



幼児期

- ・ふれあい遊び
- ・体験活動

小学生

- ・わくわく教室
- ・どようび★えいご
- ・放課後子ども教室
- ・通学合宿

中学2年生

中学3年生

- ・夢発見ウィーク
- ・幸雲南塾inさんへ

高校生

- ・中高生の！幸雲南塾
- ・マイプロジェクト
- ・キミのWill応援事業（中高生国内外研修派遣）
- ・スペシャルチャレンジ・ジュニア事業（中高生企画による国内外研修への助成）

大学生、若者、大人

社会に開かれた教育課程の実現

教育魅力化コーディネーターとしての取り組み

教育魅力化コーディネーターの専門領域は主に、「地域社会に開かれた教育を実現するための、カリキュラム設計や探究学習の推進」「放課後の探究活動・学習環境のサポート」

教育魅力化コーディネーターのミッションと役割



学校内

ミッション
社会に開かれた学校への
転換にむけた環境整備



教育魅力化コーディネーター

1. 社会に開かれた教育課程の構築（カリキュラムマネジメントの実現）
2. 探究学習の授業設計・授業開発
3. 先生とのチームづくり・体制構築

学校外(地域)



ミッション
多様な外部人材との
協働と調整



教育魅力化コーディネーター

4. 教育課程の実現に向けた地域人材・外部人材のコーディネート
5. 放課後学習・社会教育との接続
6. 生徒の募集（県外・県内）

2. 教育ワークショップ

(1) 日時 2020年2月2日(日) 13時30分～17時

(2) 場所 岡山大学附属中央図書館
本館3階セミナー室(A～C)

(3) 目的

NPOで活躍しながら学校と連携して教育支援を行っている方々の話を聞いたうえで、学校とNPOの連携のあり方について参加者との議論を深める。

(4) スピーカー

○長瀬 智寛氏(ながせ ともひろ)

愛媛県立三崎高等学校公営塾 塾長

1993年、愛知県名古屋市出身。学生時代に休学し、世界幸福度ランキング1位のフィジー共和国へ幸福の秘訣は何か調査に出る。新卒でフィジーの民間企業に就職。内閣府青年国際交流事業「世界青年の船」への参加をきっかけに帰国。現在は、四国最西端の伊方町が運営する公営塾塾長として県立高校と協働し、高校魅力化プロジェクトの一端を担う。現愛媛県青年国際交流機構会長

○土肥 潤也氏(どひ じゅんや)

コミュニティファシリテーター

1995年、静岡県焼津市生まれ。早稲田大学社会科学部研究科修士課程 都市・コミュニティデザイン論修了、修士(社会科学)。2015年に、NPO法人わかものまちなちを設立。全国各地で子ども・若者の地域参加、政治参加に関わる研修や実践支援に取り組む。2019年からは、コミュニティラボCo-℃(コード)を立ち上げ、コミュニティファシリテーターとして起業。内閣府「子供・若者育成支援推進のための有識者会議」構成員。

○森分 志学氏(もりわけ しがく)

NPO法人だっぴ 理事/事務局長

1990年、岡山県倉敷市出身。岡山大学教育学部卒業後、同大学院教育学研究科卒業。

学生時代に高大接続に関心を持ったことをきっかけに、「高校生と社会との接続をもっと充実させたい」と思い、高校生と大人の対話の場をつくる。大学院を卒業後は、大阪にて教育系の広告代理店に勤務。2017年に退職し、NPO法人だっぴの理事・事務局長として岡山にUターン。

令和元年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」
テーマ6「民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上」

【教育ワークショップ】

フィンランド・デンマーク・ドイツの教育から学ぶ 地域に根差した教育のあり方

—若者を地域で育てる—

1. 日時 2020年2月2日(日)13時30分～17時
2. 場所 岡山大学附属中央図書館
本館3階セミナー室(A～C)

3. スピーカー

○長瀬 智寛氏(ながせ とみひろ)

愛媛県立三崎高等学校公営塾 塾長

1993年、愛知県名古屋市出身。学生時代に休学し、世界幸福度ランキング1位のフィジー共和国へ幸福の秘訣は何か調査に出る。新卒でフィジーの民間企業に就職。内閣府青年国際交流事業「世界青年の船」への参加をきっかけに帰国。現在は、四国最西端の伊方町が運営する公営塾塾長として県立高校と協働し、高校魅力化プロジェクトの一端を担う。現愛媛県青年国際交流機構会長

○土肥 潤也氏(どひ じゅんや)

コミュニティファシリテーター

1995年、静岡県焼津市生まれ。早稲田大学社会科学部研究科修士課程 都市・コミュニティデザイン論修了、修士(社会科学)。2015年に、NPO法人わかものまをちを設立。全国各地で子ども・若者の地域参加、政治参加に関わる研修や実践支援に取り組む。2019年からは、コミュニティラボCo-°C(コード)を立ち上げ、コミュニティファシリテーターとして起業。内閣府「子供・若者育成支援推進のための有識者会議」構成員。

○森分 志学氏(もりわけ しがく)

NPO法人だっぴ 理事/事務局長

1990年、岡山県倉敷市出身。岡山大学教育学部卒業後、同大学院教育学研究科卒業。

学生時代に高大接続に関心を持ったことをきっかけに、「高校生と社会との接続をもっと充実させたい」と思い、高校生と大人の対話の場をつくる。大学院を卒業後は、大阪にて教育系の広告代理店に勤務。2017年に退職し、NPO法人だっぴの理事・事務局長として岡山にUターン。

4. 申し込み

大学院教育学研究科 桑原敏典(社会科教育講座)

E-mail: kuwabara@okayama-u.ac.jp

3. 教育だっぴ

(1) 日時 2020年2月9日(日) 13時～16時

(2) 場所 岡山大学教育学部講義棟1階5101

(3) 目的

教育を支える大人(教員、行政関係者、NPOなど)と教員を目指す学生が語り合い、教育について考えを深める。

(4) 企画意図

「教育」に多様性が生まれてきている現代、教育の道を志す学生たちには、(本人は気づいていないかもしれませんが)その生き方にも多様な選択肢が用意されているはずです。まずは、様々な教育観や教育の在り方・生き方があることを知ることが、将来の一步につながるのではないかと考えています。本企画では、教育の道を志す学生が、教育の世界で活躍する多様な大人と出会い対話することで、自分の教育観と向き合える場を目指します。自分の教育観と向き合い、「じゃあどうしようか」と選択肢を考えることで、(教員を目指す学生は)改めて「教員を目指す」と決意をするかもしれません。それは、教員になることをゴールに設定するのではなく、「誰にどんな教育機会を届けたいか」を考えた結果だと思えます。今回の機会が、教育業界全体の温度を若者から高めていけるようなものになればとも考えています。(NPO法人だっぴ作成の案内より抜粋)

(5) 当日スケジュール

教育×だっぴin岡山大学 タイムスケジュール

目標

時間	コンテンツ		備考・役割	準備物
11:00	集合・会場設営		場所：岡山大学教育学部5101	- ブロッカー - スケッチブック - プロジェクター - プレテマウス - 音響 - 名札 - 受付表 - 当日資料
12:00	懇親打ち合わせ			
12:30	参加者受付開始		参加者受付： 参加者案内：	
12:45	ゲスト受付開始		ゲスト受付： ゲスト履歴記入案内：	
13:00	だっぴ開始		進行：森分 音響・全体管理：	
	5 オープニング			
	10 アイスブレイク	ジェスチャーゲーム		- ジェスチャーゲームセット
13:15	57 トーク1		1グループ(合計6人) 学生 3人 おとな 3人	
	12 自己紹介	ゲスト：履歴(2分) 参加者：呼ばれたい名前、普段何してる？、興味のある分野(1分)		
	5 アイブレイク	小さい頃の夢		
	10 テーマ1	今の道にいる理由		
	15 テーマ2	あなたの生き方で悔いなくないものは何ですか？		
	15 テーマ3	あなたの教育がつくる、理想の景色とは？		
14:20	10 休憩・移動			
14:30	52 トーク2			
	12 自己紹介	ゲスト：履歴(2分) 参加者：呼ばれたい名前、普段何してる？、興味のある分野(1分)		
	10 テーマ1	人から買われた今の自分に足りないもの		
	15 テーマ2	あなたが望む子どもの幸せって？		
	15 テーマ3	勉強する意味って？		
15:30	25 クロージング			
	10 感想			
		まとめ	今日の感想+あなたにとって教育とは	
		感想共有		
		あいさつ		
	10 アンケート記入			- アンケート
		これからの動き	キャスト希望者はキャスト申込用紙に必要事項を記入	- キャスト申込用紙
15:55	5 写真撮影		カメラ：江尻	
16:00	終了・片付け			

(6) 案内



教育×だっぴ

2020年

In 岡山大学

2月9日(日)13:00~16:00

会場：岡山大学教育学部 講義棟1F 5101

対象：学生30名（先着順 定員に達し次第〆切）

参加費無料

実習で不安になった
気持ちが少し前向きになったり
気が楽になったりした。

普段は教育についての話を聞く
だけが多いですが、今回は、自分
の想いもたくさん話す事ができた
ので良かったです！

同じ先生・大人でも
考え方や生き方が違って
すごく刺激になった！

嬉しい参加者の声、続々！



お申込みフォーム

《ゲストは魅力的な大人たち》

教育の道で活躍する先生や企業人など総勢20名！

・小中高の先生 ・教育系企業 ・教育委員会 ・教育系NPO など
その他にもたくさんの教育関係者が集まります！

岡山大学生以外の参加も大歓迎です！

お問い合わせ等ございましたら、下記アドレスまでご連絡ください。

特定非営利活動法人だっぴ 森分 (dappi@dappi-okayama.com)

主催：岡山大学教育学部 共催：特別非営利法人だっぴ

(7) 参加学生の感想

私は2月9日に岡山大学で行われた教育だっぴに参加した。前回の授業で中高生だっぴに参加した人から、非常に有意義な時間だったということを知った。今回私が参加しただっぴも私にとって非常に素晴らしい時間となった。

トーク①とトーク②の時間でグループAとグループFに参加した。だっぴという活動自体初参加で、何度も参加して慣れている人の中に入るのはとても緊張したが、話を振っていただいたおかげで輪の中に入ることができた。慣れてくると、徐々に自分から積極的に話をすることもできるようになった。今回は「教育だっぴ」なので、ほかのだっぴに参加した生徒の言う通り様々なフィールドを持った人はいないだろうと思っていたが、教育関係の中でも本当に多様な職業の人がいた。中でも印象的だったのは、大学在学中に一般社団法人を立ち上げ、子供の居場所づくりや貧困対策の啓発活動などを行っている人だ。彼女は25歳で私と5つしか変わらない。芯が強く、まっすぐなひとだった。子供のことでなく、保護者にも寄り添っているんだなと感じた。私は教育関連の人間でもないし、現時点でその方向に進みたいとは考えていない。しかし、子供の教育について考えるということは自分がどのような大人、親になりたいかを考えるきっかけになった。

今回のだっぴは教育について真剣にしっかり話し合うというよりは、自分たちが子供だった頃や今の自分の根底にあるものを思い出し、これからの子供たちがどんな人になってほしいか、そのために何が必要なのかを和やかな雰囲気でも話し合った。これからの子どものことは教育者だけでなく私のような一般のひと（教育関連のことが専門ではない人）も考えるべき重要な議題だと思う。今回のような場がもっと広がって様々な人が教育と子供たちのことについて考えるようになったらいいなと思った。

今回のだっぴは「教育について考える」だったが、自分自身を振り返り、原点復帰できるきっかけにもなった。子供のころの夢や自分が大切にしている価値観など、普段思い出すことも、考えることも私はあまりしてこなかった。同じグループの人と価値観や未来の話、過去の話をする中で自分を軌道修正できたと思う。今回のだっぴでの出会いに感謝をして、自分も大学生活を頑張っていきたいと思った。そして、将来、地域社会の一員として周りのことや子供たちのことを考えられる大人になりたいと思った。

Ⅷ. 大学の教員や現職教員を対象とする研修会の企画・実施・効果の検証

1. ファシリテーション研修会

(1) 日時 2019年10月22日(火) 14時～17時

(2) 場所 岡山大学教育学部講義棟1階5101教室

(3) 内容

アクティブ・ラーニングという言葉が登場し、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が求められるようになった。教師には、知識の伝達者ではなく、学びの場を創造するファシリテーターとしての役割が期待されるようになっている。今回の研修はファシリテーションを基本から学ぶことができるようになっている。

(4) 講師

小見まいこ氏

(新潟市生まれ。若者の離職やニート・フリーター等の社会問題に問題意識を持ち始め、2009年に「学校にファシリテーション、ファシリテーショングラフィックを導入するプロジェクト」を開始、その後「にいがたファシリテーション授業研究会」へと発展し、初代代表になる。同時期に「キャリア教育が日本を救う」という言葉に出会い、子どもと社会をつなぎ、子どもの自立を促すキャリア教育の支援を始める。日本の、新潟の教育と本気で向き合いたいと、2012年4月に「みらいずworks」を設立した。その後2016年にNPO法人となる。認定キャリア教育コーディネーター。文部科学省コミュニティ・スクール推進員「CSマイスター」。) (みらいずworksHPより)

岡山大学大学院教育学研究科主催

探究を促し、深い学びを生み出す

ファシリテーション研修会

講師 NPO法人みらいずworks代表理事
小見まいこ氏



(講師紹介)新潟市生まれ。若者の離職やニート・フリーター等の社会問題に問題意識を持ち始め、2009年に「学校にファシリテーション、ファシリテーショングラフィックを導入するプロジェクト」を開始、その後「にいがたファシリテーション授業研究会」へと発展し、初代代表になる。同時期に「キャリア教育が日本を救う」という言葉に出会い、子どもと社会をつなぎ、子どもの自立を促すキャリア教育の支援を始める。日本の、新潟の教育と本気で向き合いたいと、2012年4月に「みらいずworks」を設立した。その後2016年にNPO法人となる。認定キャリア教育コーディネーター。文部科学省コミュニティ・スクール推進員「CSマイスター」。(みらいずworksHPより)

【研修会の内容】
アクティブ・ラーニングという言葉が登場し、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が求められるようになりました。教師には、知識の伝達者ではなく、学びの場を創造するファシリテーターとしての役割が期待されるようになっていきます。今回の研修はファシリテーションを基本から学ぶことができるようになっていきます。

日程 2019年10月22日(火・祝)

時間 14:00～17:00 **参加費無料**

場所 岡山大学教育学部講義棟1階5101講義室

対象 小・中・高・大学の教員、教育関係の仕事に携わる方々(先着順に受付。定員50名になり次第締め切り。)

新しい学習指導要領等が目指す力「次期改訂の視点は、子供たちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるものの全てを、いかに総合的に育てていくかということである。」(文部科学省HPより)

お申込み：岡山大学教育学部桑原敏典研究室

Mail kuwabara@okayama-u.ac.jp

FAX 086-251-7736

2. ファシリテーションを学ぶ会

(1) 日時 2019年10月23日(水) 13時～16時

(2) 場所 岡山大学教養教育棟C棟 C32教室

(3) 内容

「話し合いがうまくいかない」、「話し合いが深まらない」、このような声をよく聞きます。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が求められるようになりましたが、それを実現するのはなかなか難しいようです。この研修では、子供たちの主体的な話し合いを促すファシリテーションの方法を、基礎から学ぶことができます

(4) 講師

小見まいこ氏

岡山大学大学院教育学研究科主催

話し合いを楽しく、活性化する

ファシリテーションを学ぶ会

講師 NPO法人みらいずworks代表理事
小見まいこ氏



(講師紹介)新潟市生まれ。若者の離職やニート・フリーター等の社会問題に問題意識を持ち始め、2009年に「学校にファシリテーション、ファシリテーショングラフィックを導入するプロジェクト」を開始、その後「にいがたファシリテーション授業研究会」へと発展し、初代代表になる。同時期に「キャリア教育が日本を救う」という言葉に出会い、子どもと社会をつなぎ、子どもの自立を促すキャリア教育の支援を始める。日本の、新潟の教育と本気で向き合いたいと、2012年4月に「みらいずworks」を設立した。その後2016年にNPO法人となる。認定キャリア教育コーディネーター。文部科学省コミュニティ・スクール推進員「CSマイスター」。(みらいずworksHPより)

【研修会の内容】
「話し合いがうまくいかない」、「話し合いが深まらない」、このような声をよく聞きます。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が求められるようになりましたが、それを実現するのはなかなか難しいようです。この研修では、子供たちの主体的な話し合いを促すファシリテーションの方法を、基礎から学ぶことができます。

日程 2019年10月23日(水)

時間 13:00～16:00

場所 岡山大学教養教育棟C棟 C32教室

対象 大学生・大学院生

新しい学習指導要領等が目指す力「次期改訂の視点は、子供たちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるものの全てを、いかに総合的に育てていくかということである。」(文部科学省HPより)

お申込み：岡山大学教育学部桑原敏典研究室

Mail kuwabara@okayama-u.ac.jp

FAX 086-251-7736

3. 探究的な学びに関する研修会（国際バカロレアワークショップ）

（1）日時 2019年1月29日（水）15時～17時40分

（2）場所 岡山大学教育学部講義棟二階 5208 教室・一階 5101 教室

（3）目的

国際バカロレアのカリキュラムや指導法をふまえて、探究的な学びを展開する方法について参加者同士で議論を深める。

（4）内容

第一部においては、国際バカロレアの概要と、それに基づく高等学校のカリキュラム、また、国際バカロレアで学ぶ学生の特質について、二人の講師を招いて理解を深める。

第二部においては、国際バカロレアで学んだ本学の学生に、実際に自分たちが学んだ方法がどのようなものであったかを再現してもらい、国際バカロレアの学びについて理解を深める。

（5）講師

- ・田原 誠先生（岡山理科大学附属中学校・高等学校・校長、前岡山大学副学長（入試改革担当））
- ・Sabina Mahmood 先生（岡山大学全学教育・学生支援機構・准教授）
- ・野村慶太（教育学部学校教育教員養成課程小学校コース英語教育専修3年生）
- ・山部雅帆（教育学部学校教育教員養成課程小学校コース国語教育専修1年生）

科学研究費補助金・基盤研究(B)(一般)「国際バカロレア(IB)に基づく
学校改革の推進—教科教育とIBの比較研究をふまえて—」関連事業

【国際バカロレア(IB)ワークショップ】 国際バカロレア教育の展開とIB生の成長

1. 日時 **2020年1月29日(水)**

第一部 15時～16時30分

第二部 16時40分～17時40分

2. 場所 岡山大学教育学部講義棟

第一部 講義棟二階5208教室

第二部 講義棟一階5101教室

3. 講師

第一部:IBに関する講演会

○田原 誠先生(岡山理科大学附属中学校・高等学校・校長、前岡山大学副学長
(入試改革担当))

○Sabina Mahmood先生(岡山大学全学教育・学生支援機構・准教授)

*お二人とも本学のIB研究に長く携わっておられました。田原先生には、岡山理科大学附属高等学校のIB教育について、Sabina Mahmood先生には、本学のIB入学生に対する調査結果を中心にお話しいたします。

第二部:本学のIB学生によるワークショップ:IBで生徒はどのように学んでいるのか

○野村慶太(教育学部学校教育教員養成課程小学校コース英語教育専修3年生)

○山部雅帆(教育学部学校教育教員養成課程小学校コース国語教育専修1年生)

4. 申し込み

大学院教育学研究科 桑原敏典(社会科教育講座)

E-mail:kuwabara@okayama-u.ac.jp



4. 教員養成・研修プログラム開発研修会（グローバル・シティズンシップ育成に関する研修会）

(1) 日時 2019年2月17日（月）15時30分～17時40分

(2) 場所 岡山大学教育学部講義棟1階5102教室

(3) 目的

これからの教員養成を考えるうえで重要なグローバル・シティズンシップの育成について、そのねらい、方法、内容について理解を深めるとともに、具体的な育成方法を構想できるようにする。

(4) 講師

藤原孝章先生（同志社女子大学・特任教授、兵庫教育大学教職大学院・客員教授、日本国際理解教育学会前会長）

（主な著書）

- ・『グローバル教育の内容編成に関する研究』（単著）風間書房、2016年。
- ・『大学における海外体験学習への挑戦』（共著）ナカニシヤ出版、2017年。
- ・『社会参画と社会科教育の創造』（共著）学文社、2010年。
- ・『外国人労働者問題をどう教えるかーグローバル時代の国際理解教育』（単著）明石書店、1994年。
- ・『シミュレーション教材「ひょうたん島問題」』（単著）明石書店、2008年。

(5) 案内

文部科学省「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」
テーマ6 民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上
「NPOとの連携に基づくファシリテーション力育成を目指した教員養成・研修プログラム開発」関連事業

【教員養成・研修プログラム開発研修会】

グローバル・シティズンシップの育成

講師：藤原孝章先生(同志社女子大学・特任教授、
兵庫教育大学教職大学院・客員教授、
日本国際理解教育学会前会長)

講演タイトル

「グローバルシティズンシップの育成原理と方法」

1. 日時 2020年2月17日(月)15時30分～17時30分

2. 場所 岡山大学教育学部講義棟1階5102教室

3. 内容

藤原孝章先生は、国際理解教育、グローバルシティズンシップ教育(GCED)の専門家で、多数の研究成果をご発表されています。今回のご講演では、グローバルシティズンシップ教育の理論や背景についてユネスコの動きなどを含めてお話しいただいたうえで、それを実践に生かす方法についてもご提案いただきます。

(主な著書)

- ・『グローバル教育の内容編成に関する研究』(単著)風間書房、2016年。
- ・『大学における海外体験学習への挑戦』(共著)ナカニシヤ出版、2017年。
- ・『社会参画と社会科教育の創造』(共著)学文社、2010年。
- ・『外国人労働者問題をどう教えるかーグローバル時代の国際理解教育』(単著)明石書店、1994年。
- ・『シミュレーション教材「ひょうたん島問題」』(単著)明石書店、2008年。

4. 申し込み

大学院教育学研究科 桑原敏典(社会科教育講座)

E-mail:kuwabara@okayama-u.ac.jp



4. 教育評価のあり方に関する研修会（感染症拡大防止のため中止）

(1) 日時

2020年3月3日（火）

13:00～14:00 打ち合わせ

14:00～15:00 講演「学校教育におけるプログラム評価の可能性（仮題）」

15:00～15:30 休憩

15:30～17:00 学習会「プログラム評価の実践：事例に基づく検討会（仮題）」

17:00～17:30 省察会

(2) 場所 岡山大学教育学部本館4階第一会議室（予定）

(3) 講師・指導助言者：米原 あき 先生（東洋大学・教授）

(4) 目的

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の重要性が謳われており、こうした教育課程の理念を具体化するためには、学習・指導方法のみならず、評価の在り方も改善していくことが必要であると指摘されている。従来、評価と言えば、学校や児童生徒の達成度を、ある取り組みの事後に測定して是非の判断を行う「実績測定」を中心とした総括評価が主であった。これに対して昨今求められているのは、「指導と一体化した評価」やプロセスを重視した「形成的な評価」である。「評価 (evaluation)」という言葉の原義は、「価値を引き出す (extract-value)」ことにある。今、改めて評価の原義に立ち返り、「社会に開かれた教育課程」が実現しようとしている価値を引き出すための評価とマネジメントのあり方について議論し、理解を深めることを本会の目的とする。

(5) 案内

岡山大学大学院教育学研究科 主催

これからの教育評価のあり方に関する講演会・学習会

日時：2020年3月3日(火) 14:00～

場所：岡山大学 教育学部(本館4階 第一会議室) 岡山市北区津島中 3-1-1

このたび岡山大学大学院教育学研究科では標記の講演会・学習会を開催することといたしました。参加ご希望の方は、以下の申込先まで、電子メールでお申し込み下さい(お申し込みの際は、講演会・学習会のいずれに参加するかを明記して下さい)。先着順で定員に達するまで受け付けさせていただきます。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

趣 旨：新学習指導要領が重視している「社会に開かれた教育課程」を具体化するためには、学習・指導方法のみならず、評価の在り方を改善していく必要があります。これまでは、評価と言えば、学校や児童生徒の達成度を、ある取り組みの事後に測定する総括評価が中心でした。これに対して、現在求められているのは、「指導と一体化した評価」やプロセスを重視した「形成的な評価」です。「評価(evaluation)」という言葉の原義は、「価値を引き出す(extract-value)」ことにあります。この会では、あらためて評価の原義に立ち返り、「社会に開かれた教育課程」が実現しようとしている価値を引き出すための評価とマネジメントのあり方について理解を深めたいと思います。

期 日：2020年3月3日(火)

内 容：14:00～15:00 講演会「学校教育におけるプログラム評価の可能性」 [定員 40名]
講師：米原 あき 先生(東洋大学・教授)

15:30～17:00 学習会「プログラム評価の実践－事例に基づく検討」 [定員 20名]
指導助言者：米原 あき 先生(東洋大学・教授)

講師紹介：米原 あき 先生(東洋大学社会学部・教授)

学 歴：インディアナ大学大学院教育学研究科博士課程修了(Ph.D)

専 門：比較教育政策学・人間開発論・政策評価

社会活動：国際協力機構(JICA) 業務実績評価アドバイザー

神奈川県 SDGs 社会的インパクト評価モデル検討委員会委員

川崎市政策評価審査委員会委員・教育福祉部会部会長

横浜市立みなとみらい本町小学校学校評議員 ほか

Ⅸ. まとめと今後の課題

1. シンポジウム及びフォーラムの開催

(1) 地域社会と連携した公民・主権者教育とそれを支える教員養成・研修のあり方に関するシンポジウム（略称：「地域連携教育シンポジウム」）

①日時 2020年2月28日（金）13時から19時30分

②場所 新潟大学駅南キャンパス（ときめいと）講義室B（新潟市中央区笹口1-1）

③内容・講師

◎第一部◎

13：00～13：20 開会の挨拶・岡山大学の取組報告（桑原敏典）

13：20～14：20 講演「NPOと連携に基づく教育実践の方法と課題」（仮題）
川端弘実先生（新潟大学教職大学院）

14：20～14：30 休憩

14：30～16：30 パネルディスカッション「地域社会に開かれた教育課程の作り方」（仮題）

パネラー

・川端弘実先生（新潟大学教職大学院）

・小見まいこ様（NPO法人みらいず Works）

・小川久美子様（NPO法人教員サポート Smile ういんず）

・小山茂喜先生（信州大学）

・吉村功太郎先生（宮崎大学）

コーディネーター

・桑原敏典（岡山大学）

◎第二部◎ コメンテーター：渡部竜也先生（東京学芸大学）・田本正一先生（山口大学）

16：45～17：15 研究発表1 東京学芸大学大学院生

17：15～17：45 研究発表2 紙田路子先生（岡山理科大学）

17：50～19：30 研究交流（ラウンド・テーブル方式、一人報告20分程度）

報告者：古野香織・別木萌果・山田真珠・杉田進太郎

④案内

2020年2月11日

地域社会と連携した公民・主権者教育とそれを支える教員養成・ 研修のあり方に関するシンポジウム (略称：「地域連携教育シンポジウム」)

文部科学省「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」テーマ6「民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上」主題「NPOとの連携に基づくファシリテーション力育成を目指した教員養成・研修プログラム開発」事業

1. 日時 2020年2月28日(金) 13時から19時30分
 2. 場所 新潟大学駅南キャンパス(ときめいと)講義室B(新潟市中央区笹口1-1)
 3. プログラム
- ◎第一部◎
- 13:00～13:20 開会の挨拶・岡山の取組報告(桑原敏典)
- 13:20～14:20 講演「NPOと連携に基づく教育実践の方法と課題」(仮題)
川端弘実先生(新潟大学教職大学院)
- 14:20～14:30 休憩
- 14:30～16:30 パネルディスカッション「地域社会に開かれた教育課程の作り方」(仮題)
パネラー
- ・川端弘実先生(新潟大学教職大学院)
 - ・小見まいこ様(NPO法人みらいず Works)
 - ・小川久美子様(NPO法人 SMILE ういんず)
 - ・小山茂喜先生(信州大学)
- コーディネーター
- ・桑原敏典(岡山大学)
 - ・吉村功太郎先生(宮崎大学)
- ◎第二部◎ コメンテーター：渡部竜也先生(東京学芸大学)・田本正一先生(山口大学)
- 16:45～17:15 研究発表1 東京学芸大学大学院生
- 17:15～17:45 研究発表2 紙田路子(岡山理科大学)
- 17:45～19:30 研究交流(東京学芸大学と岡山大学の院生による研究報告)

(2) 地域と学校の連携のあり方とそれを支える人材養成に関するフォーラム（感染症拡大予防のため中止）

①日時 2020年3月14日（土）13時～16時

②場所 岡山大学教育学部講義棟

③目的

学校の持つ課題が様々に語られる一方で、学校の外では様々な人が、地域社会を舞台に教育に関わる多様な活動を展開している。シンポジウムでは地域と学校をつなぐ事例を紹介しながら、地域社会と学校の連携がもたらす可能性について議論していきたい。そして、そのような活動を支える人材をどのように養成していけばよいかを追究したい。

④テーマ案 「探究を深める地域と学校の連携の在り方と、それを支える人材の養成」

⑤プログラム案

1) 岡山大学教育学部の取り組みの報告

「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業テーマ6『民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上』の成果報告：桑原敏典（岡山大学）

2) パネルディスカッション

「子どもも大人も元気にする学校と地域社会の連携の在り方とそれを支える人材の養成」

・ファシリテーター 森分志学さん（NPO法人だっぴ）

パネラー 井辻美緒（一般社団法人やかげ小中高こども連合）

北浦菜緒（カンコーマナボネクト株式会社）

久常宏栄（岡山県立津山東高校）

三村雅彦（NPO法人みんなの集落研究所）

和田優輝（和田デザイン事務所）

岡島春恵さん（NPO法人カタリバ）

3) ワークショップ

参加者とともに、これからの地域連携を支える人材養成のあり方を探る

⑥今後の展望

岡山大学教育学部の教員養成カリキュラムにおいて地域連携を支える人材養成プログラムを開発・実践する

探

を深める!

究

地域と 学校の連携 シンポジウム

@岡山大学教育学部

2020年
3/14(土)13時~16時

場 所 岡山大学
教育学部講義棟5102教室

【探究を深める地域と学校の連携の在り方と、それを支える人材の養成】

学校の持つ課題が様々に語られる一方で、学校の外では様々な人が、地域社会を舞台に教育に関わる多様な活動を展開しています。今回のシンポジウムでは「地域と学校の連携」をテーマに、その連携がもたらす可能性や目指すべき在り方などについて議論していきたいと思います。

PROGRAM
(予定)

1 岡山大学教育学部の取り組みの報告

教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業
『民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上』の成果報告

登壇者

桑原 敏典(岡山大学教育学部教授)

2 パネルディスカッション&ワークショップ

地域づくりを進めるコーディネーターの在り方

パネリスト

井辻 美緒(一般社団法人やかげ小中高こども連合)

久常 宏栄(岡山県立津山東高校)

北浦 菜緒(カンコーマナボネクト株式会社)

和田 優輝(株式会社和田デザイン事務所)

ファシリテーター

森分 志学(NPO法人だっぴ)

三村 雅彦(NPO法人みんなの集落研究所)

【主催】岡山大学教育学部 【共催】NPO法人みんなの集落研究所、NPO法人だっぴ、備中志事人 *文部科学省「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の一環として実施しています

参加
無料

ウェブフォームからお申し込みください

<https://forms.gle/kXT9FRuuG2sdmJEPA>



2. まとめと今後の課題

本事業の成果としては、まず、下記の5点を挙げる事ができる。

- ①教員の資質・能力としてのファシリテーション力には、学びの場を作り、必要な手立てを臨機応変に考え、実行できる力があり、それを支える他者の考えを受け止め共感できる力も必要であること。
- ②教師がファシリテーション力を発揮することで、子どもの学びの場が広がり、学校外の様々な人々や組織と連携を構築することができること。
- ③ファシリテーション力育成を目標とする教員養成カリキュラムは、NPOなど地域の教育を推進している機関と連携することで効果的なものになること。
- ④ファシリテーション力育成を目指した教員養成カリキュラムは、4年間の教育課程において、体験を中心とする活動から、NPO等のスタッフと語り合い、その生き方に触れる学習を経て、そこで学んだことを実践の中で生かす機会を含むインターンシップ等の活動へというプログラムとなること。
- ⑤NPO等におけるインターンシップは、学生が大学で学んだ知識や理論を応用する場としても、教育実習や学校でのインターンシップでの経験を振り返り、そこで学んだことを活用する場としても有効あること。
- ⑥NPO等と連携をした現職教員と大学生・大学院生が交流する教育に関するイベントは、多様な人々と教育について意見交換を行い、自らの考え方を見直す場として、養成段階の学生には大きな意義を持っていること。
- ⑦NPO等と連携した研修は、大学の教員や現職教員にとって、教育や教師とは何かということについて考えたり、他者の意見を理解したりする場として、教員養成や研修と同等に意味があること。

一方で、本調査研究においては、NPO等と連携した大学の授業科目やインターンシップ等の教育プログラムの効果について、実施前後の変化や成長を十分に検証しえなかったという課題がある。すなわち、効果の検証という点では、より入念な準備の下で、到達目標を明確にして、学習者が自己の成長を確認し、実感できるような工夫が今後必要であると言える。また、本事業を通して開発したカリキュラムを持続可能なものとするためには、担当者である研究者にはどのような準備や資質が求められるかを明らかにする必要もある。現在では、教員養成も研修も学校の教育現場で行うことが最も良い形であると考えられがちであるが、社会に開かれた教育課程を実現するためにも、それらを学校外の場に拡大していく必要があると言える。

文部科学省委託事業
令和元年度 教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業
実施テーマ 6. 民間教育事業者との連携による教員の資質能力向上

NPOとの連携に基づくファシリテーション力育成を目指した
教員養成・研修プログラム開発
報告書

[発行] 令和2年3月

[発行者] 岡山大学教育学部長 三村由香里

[編集] 岡山大学大学院教育学研究科
教員養成カリキュラム検討機構 委員 桑原敏典
〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中3-1-1

[印刷・製本] サンコー印刷株式会社
〒719-1134 岡山県総社市真壁 871-2

本報告書は、文部科学省の委託事業として国立大学法人 岡山大学が実施した令和元年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業の成果を取りまとめたものです。したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。